國學院大學学術情報リポジトリ

『アイルランド地誌』を読む：ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001019

学術論文

『アイルランド地誌』を読む－ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて

永井　一郎

▶ **要　約**

ギラルドゥス・カンブレンシスはどのような意図をもって『アイルランド地誌』を書いたのか。彼の執筆意図を探り出すことが本稿の目的である。

私は彼が以下の 3 つの目的をもってこの著作に取り組んだという結論を得た。

(1) イングランド王宮を中心とするイングランドの支配者たちに，未知の世界といってよいアイルランドの地誌を紹介する。

(2) ヘンリ二世のアイルランド征服計画を自分が支持していることを明らかにし，征服に必要な情報を提供する。

(3) ヘンリ二世はギラルドゥスが古いウェールズ王家の血をひき，ウェールズ人支配者たちと接触していることを理由に彼の忠誠心に疑いを持っていたが，自分の栄達の妨げとなる王の疑いを解くために，自分がいかに忠実かつ有能な従者であるかをこの著作によって実証する。

▶ **キーワード**

『アイルランド地誌』　ギラルドゥス・カンブレンシス　ヘンリ二世のアイルランド征服　「ケルト辺境」意識

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ギラルドゥスの生涯
Ⅲ　『アイルランド地誌』－史料と内容
Ⅳ　『アイルランド地誌』－執筆意図
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

12世紀第4四半期から13世紀初頭にかけてイングランド，ウェールズで活躍した聖職の文筆家ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis，本名Giraldus de Barri，1145/6～1222/3）は処女作『アイルランド地誌（Topographia Hibernica）』をどのような意図で執筆したのか，また，その意図はどのように表現されているか(1)。これらの点について検討することが本稿の目的である。

私はこれまで同じギラルドゥスの『ウェールズ案内（Descriptio Kambriae）』に焦点を絞って議論してきたが(2)，本稿からしばらくの間研究対象を拡大し，同書に先立って彼が発表した3著作，『アイルランド地誌』，『アイルランド征服（Expugnatio Hibernica）』，『ウェールズ旅行記（Itinerarium Kambriae）』を順次取り上げることにする(3)。これら3著作を視野に入れることによって，『ウェールズ案内』をより深く理解する手掛かりが得られると私は考えている。

4著作の中心的テーマは各タイトルが示すように違っているが，3つの点で共通性をもっている。まず，アイルランド，ウェールズはともに，ギラルドゥスが仕えるイングランド王宮から見て辺境地域であった。次に，両地域に対してイングランド王権は征服計画をもっていた。さらに，4著作はギラルドゥスが王宮に仕えていた時期に構想され，執筆された。実際，ギラルドゥス自身が4著作をひとつのグループとして扱い，いわばシリーズものと見なしている(4)。

したがって，4著作を読み比べ，その主要な内容を対比的に検討することは，前半生期のギラルドゥスについて関心をもつ者，特にこの時期に書かれた『ウェールズ案内』に注目する者にとって当然なすべき作業であり，これまで拙稿を含めてそうした検討が行われている(5)。例えば，『アイルランド地誌』と『ウェールズ案内』の記述を比較しながら，ギラルドゥスがアイルランド人・社会とウェールズ人・社会を同じように認識，評価していたのかどうか，違いがあるならば，それはどのような点なのか探りだすのである。また，これほど明確にテーマ化しなくても，ウェールズに関する彼の記述を紹介する際にアイルランドへの言及を併せて紹介することがしばしば見られる。

こうしたいわば自然な比較研究に比べると，本稿に始まる3つの拙稿は3つの特徴をもっている。第1に，4著作の構想ないし執筆意図がどのような記述として具体化されているか，すなわち，意図と内容の関連性について注目する。『ウェールズ案内』については先行拙稿でこの検討を済ませており(6)，本稿以下の作業はその継続となる。第2に，例え

ば習慣や気性といった具体的な事項についてアイルランドとウェールズを比較する場合には，とりあげる著作は『アイルランド地誌』と『ウェールズ案内』にほぼ限定されるが，執筆意図と内容の関連性を取り上げるのであれば4著作を通じた検討ができる。また，その結果を踏まえて，より広い視野で再度各著作を読み直すことが可能になる。

第3の特徴は検討方法にかかわる点である。本稿以下の3つの拙稿では，4著作にギラルドゥスが明示していない執筆意図が含まれているのではないかという仮説を置き，その意図を暗示する記述を探るという方法をとる。なぜこのような手間のかかる方法を使うのか少し説明しよう。

ギラルドゥスの生涯を追う拙稿で明らかにしたように，ギラルドゥスは早くから文筆家としての名声と聖職者としての栄達を生涯の目標と定め，とくに後者，具体的にはセント・デイヴィズ司教になるための努力を重ねていた。この点は王に仕え，4著作を構想・執筆していた時期でもはっきりしている。他方，彼は出自に由来する2つの後ろ盾をもち，南ウェールズに定着していたアングロ・ノルマン貴族たちと同じくウェールズ人支配者たちの支援を期待して生涯目的を立てていたのだが，王宮に伺候し，王のウェールズ政策を補佐することは，前者はともかくとして，後者との関係を悪化させる危険性をはらんでいた。彼はこの点を承知して王宮付き司祭に就任していたのである。彼は2つの後ろ盾を失わないようスタンスの表出に工夫をしている。しかし，それは，彼自身の認識からしても，外部から見ても，矛盾含みになることは避けられなかった。私はこうした複雑な彼の立場が『ウェールズ案内』の具体的の記述に反映していると考えている(7)。とすれば，同様な事情が先行する3著作にあってもおかしくない。少なくとも3著作について同様の検討する価値はある。こう考えて私は本稿に始まる3つの拙稿を構想した。

本稿の目的を正確に説明するためには，回り道になるが，先行する2つの拙稿で展開した議論を紹介するのが便宜である。

第1の拙稿は「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」で，その議論は以下の5点に整理できる。

(1)『ウェールズ案内』は2巻構成の著作であり，より細かく分ければ第1序文，第2序文，第1巻本文（18章），第2巻序文，第2巻本文（10章）となる。ただし，一読して分かることであるが，第2巻の第1～第7章と第8章～第10章はまったく違った内容となっている。第1巻第1章から第2巻7章まではタイトルにふさわしい地誌関係の内容が，重複を含みながら，順次取り上げられているのに対して，第2巻第8章～第10章はイングランド王宮とウェールズ人支配者たちに向けた政治的ないし軍事的な戦略提言となっている(8)。

(2) しかも，第2巻第8章～第10章の内容が相互に矛盾含みになっている。すなわち，

第8章はウェールズを征服する戦略を，第9章では征服後ウェールズを統治する際の要点を具体的に挙げているのに対して，第10章ではウェールズ人が政治的自立を回復するために必要な条件を，軍事・政治面から精神的な面まで広く説いている。12世紀初頭以降イングランド王権はウェールズを征服すべき国とみなし，ウェールズ側はアングロ・ノルマン勢力を侵略者として恐れる関係が基本的にでき上がっていたから，ここでギラルドゥスは敵対する2つの勢力にそれぞれ自己利益を追求する方法を提案しているわけで，当然提案の内容は相対立するものとなる(9)。

(3) もしギラルドゥスがイングランド，ウェールズに無縁の人であれば，第三者としてこのような矛盾含みの戦略提案をすることもあろう。しかし，彼はその血統の4分の3がヘンリ一世に率いられてウェールズ南西部に定着したアングロ・ノルマン貴族の家系に，4分の1が古い南ウェールズ王家に由来しており，加えて，成人後の彼はイングランド王宮と南ウェールズ人支配者たちの間に立って活動していた。無縁どころか，対立する両勢力に所属し，その二元性を生かして活躍していたのである。『ウェールズ案内』に移して言えば，彼は第8，第9章と第10章のいずれにも直接の利害関係をもつ立場にあったと言ってよい(10)。

(4) したがって，ギラルドゥスは上記の戦略提案によってイングランド側，ウェールズ側双方の信頼を失いかねない状況になったと推測される。イングランド側，特に王宮の人々は第10章を見て，ギラルドゥスはウェールズ征服計画を妨害するのかと警戒したであろう。また，ウェールズ人支配者たちが第8，第9章の内容を知ったならば，彼は自分たちの滅亡をはかっていると怒るはずである。第三者であれば，ギラルドゥスは二枚舌を使う人物かと疑いをもつであろう。第2巻末尾の3章はいくつもの意味で彼自身に利益よりも損失をもたらす可能性が高いのである(11)。

(5) こうした危険性をギラルドゥスが察知できなかったとは考えられない。とすれば，彼が第2巻末尾の3章をあえて構想し記述したのはなぜか。第1の拙稿はこの疑問を提示したところで終わっている。私の疑問は2つの点から構成されている。ひとつは彼がなぜ相互に矛盾する内容の第8，第9章と第10章を書き，しかも，並置したのかという点，もうひとつは『ウェールズ案内』の中心テーマである地誌と直接関係のないこれら3章をなぜ全巻の末尾に組み入れたのかという点である。ギラルドゥスの不注意，無知が生み出したものでないことははっきりしているので，何か理由があっての執筆，収録であると考えられるが，それは何か。

こうした疑問は続く数点の拙稿でも基本的な視角となっているが，『ウェールズ案内』そのものを改めて検討対象としたのは第2の関連拙稿「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図とかかわらせて」である。ここで提示した私の議論を以下4

点にわけて紹介する。なお，整理の都合を考えて，上記(1)から(5)を継承した番号を付すことにする。

(6) ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の序文で２つの執筆意図を挙げている。ひとつは，人々に知られていないウェールズの自然と社会について紹介すること，もうひとつは，ギルダス（Gildas）にならってウェールズ人の歴史をまとめ，彼らに警告することである。誰にこうした情報を伝えようとしたのか彼は明記していないが，前者の「人々」で想定されている読者・聴者はイングランド王宮を中心とする王国支配者層であり，後者はウェールズ人支配者層であったと考えてまず間違いない[12]。

(7)『ウェールズ案内』は，何よりもまず地誌の書である。したがって，上で挙げたウェールズの自然と社会の紹介する記述はこの書の中核をなし，しかも全編にわたって見られる。第２の執筆意図のうち，ウェールズ人の歴史は自然や社会に関する記述の中で散発的に言及されている。これら３種の事項をあわせると同書は全体としてよくまとまった地誌となっている。また，第２の執筆意図に含まれるウェールズ人に対する警告は第１巻の末尾と第２巻の末尾，すなわち，ギラルドゥスの議論の結論部分に姿を見せる。ウェールズ人の歴史に関する記述は上記のように散在しているので，警告は歴史の整理を受けて発せられる形になっていないが，読者は第２の執筆意図がどこでどのように具体化されているか容易に確認できる[13]。

ここまでであれば『ウェールズ案内』は表面通りの素直な構成の著作であり，高い完成度をもっている。

(8) しかし，私はギラルドゥスがこの２つに加えて第３の意図を『ウェールズ案内』に盛りこんだと推定している。それは，ヘンリ一世時代に始まるウェールズ征服計画を継承し，機会があればいつでも侵攻しようと考えていたヘンリ二世に征服の論拠や具体的方法を提示しようとする意図である。ただし，この意図は暗示されているだけなので，その存在は読者が彼の一般的な記述をどのように理解するかにかかっている。しかし，ウェールズ人・社会の文明度を極端に低く評価し，ウェールズ人は信頼が置けないので交渉相手とすべきではないといった「野蛮な」ウェールズ人像を作り上げている点，また，ウェールズ人をいかに征服・統治すべきか具体的な方策を提示している点から，私は確実性の高い推定であると考えている[14]。実際多くのギラルドゥス研究者が同様な判断をしている。

第３の執筆意図を具体化したと思われる記述を探してみると，その大部分が第２巻に集中しており，末尾の３章を除き，第２巻はこうした記述で占められている。また，第１巻はウェールズ人の長所，短所を含んでいて，それ自体でまとまった地誌となっている。

(9) 以上のように『ウェールズ案内』の多くの事項についてそれぞれどのような意図に基づいて記述されたか確認ないし推定してみると，ギラルドゥスの言葉に従って表面的に読み進めた場合とは違った全体構成が浮かび上がってくる。すなわち，通常は第1巻と第2巻を合わせてウェールズの地誌が記されていると理解するのであるが[15]，むしろ第1巻，第2巻は別のものとして構想，執筆され，2つが合体されて『ウェールズ案内』に仕上げられた可能性が生まれる。ギラルドゥス自身はこうした2段階の構成にまったく言及していないが，第3の意図は隠されているのであるからこれは当然であろう。

もし『ウェールズ案内』の構成や構想に関する上記の推測が仮説としてであれ成り立つのであれば，この仮説によって第2巻でギラルドゥスがウェールズ人・社会の短所を極端に誇張している理由を推定できるようになる。ただし，『ウェールズ案内』に対する全ての疑問が解消するわけではない。第10章，すなわち，ウェールズ人の自立奪回を説く記述は依然として孤立状態である。同じ内容の提案がごく簡潔な表現で第1巻の末尾に見られるので，これと結び付けたくなるのであるが，巻は別であり，位置も大きく離れている[16]。

以上の紹介から第2の関連拙稿が本稿にどのような示唆を与えてくれるのか整理しておこう。いずれも本稿で『アイルランド地誌』の記述を検討する際に重要な手掛かりとなる点である。

① ギラルドゥスは『ウェールズ案内』を3種類の意図をもって書き進め，しかも，そのひとつを明示しないまま著作の中に埋め込んでいるが，このような密かな執筆意図が他の3著作にも潜んでいないかどうか。

② 3種類の執筆意図が具体化された記述を見ると内容的に矛盾含みになっているが，同様な記述は他の著作にも発見できるかどうか。

③ ギラルドゥスが①，②のように複雑な，あるいは，無理のある著述をしたのは，『ウェールズ案内』執筆時に彼が複雑な政治状況に置かれていたからだと推測される。彼は自分のセント・デイヴィズ司教任命を拒否したヘンリ二世の判断を覆すために，これまでとは違ったスタンスをあえて表明していた可能性が高い[17]。同様なことが他の著作についても推定できるかどうか，できるならば，そこからどのような示唆が得られるか。

④ 『ウェールズ案内』はアイルランド，ウェールズに関する4著作の最後に書かれている。上では4著作をほぼ同時期の作品として扱ってきたが，より細かく見ると，当然のことながら執筆の時期はずれており，各時期のギラルドゥスの思考や政治的スタンスが多少とも違っている可能性が高い。こうした彼自身の違いが4著作の内容にどのように反映しているか，反映しているならば，変化はどのような方向性をもっているか。

本稿は以上４点を手がかりとして『アイルランド地誌』の内容を検討する。

Ⅱ　ギラルドゥスの生涯

本節は『アイルランド地誌』の構想や内容に影響を与えた可能性のある事項を中心にギラルドゥスの生涯を簡潔に紹介する。第４節の議論をスムーズに展開するための準備作業である。

ひとつの著作の背景ないし基礎となる事項にはいろいろなものが考えられるが，本節ではまずギラルドゥスが立てた生涯目標について説明し，ついで，目標達成にプラス，マイナスの影響を与えたと推定される事件を順次紹介する。具体的には，彼が生涯の目標をどのように立てたのか，目標達成のためにどのような努力を重ねたのか，どのような事件が目標追及を阻害したのか，そうした事件に遭遇して彼はどのように考え，また，行動したのかといった点である。生涯計画をめぐるギラルドゥスの思考と行動といってもよい。

なぜ本節がこのような事項に注目するのか，説明が必要であろう。

ひとつの理由は，ギラルドゥスが生涯を見通した目標を設定し，その時々の状況に応じて追求し続けたという事実にある。具体的内容は後に紹介するが，ギラルドゥスが明確な生涯目標を立てていて，生涯を通じてこれが彼の思考や行動に大きな影響を与えたことは間違いない。生涯目標を中軸として彼の一生を語ることが可能である。

もうひとつの理由は，前節で紹介した先行拙稿で私は，ギラルドゥスの生涯計画が著作，特にアイルランド，ウェールズに関する４部作に深くかかわっていて，目的達成のために著作を活用したという仮説を立てて議論を進めてきたからである。この仮説はまだ充分に立証されていないが，著作の中には明示的，あるいは，暗示的に彼の生涯計画が言及されており，さらに検討を重ねる価値があると私は考えている。

以上２点をふまえて，さらに２つ説明を加えておこう。いずれも本節が取り扱うタイムスパンに関連している。

第１に，本節で念頭に置くギラルドゥスの著作は『アイルランド地誌』だけではなく，『アイルランド征服』，『ウェールズ旅行記』，『ウェールズ案内』まで含んでいる。これは，４著作がひとつのまとまりをなして，しかも，比較的短期間に集中して書かれたことを考えれば当然である。この期間に彼の思考や行動方針がまったく変化しなかったわけではないが，一貫性のほうが大きい。まずはこの時期に共通している諸事項を明らかにして，それとの対比で変化の意味を考えるのがよい。具体的に言えば，４著作が書かれたのは 1187

年ないし88年から1194年までの7年間であり，本節にとって最も重要な時期のひとつである。

第2に，本稿は4著作が最初に発表された時期だけでなく，それぞれの改訂版が作成された時期まで視野に入れる。例えば『アイルランド地誌』の現存マニュスクリプトは，次節で紹介するように，4つの版に分類され，第1，第2版はギラルドゥス自身によってつくられたことが分かっている。他の3著作についても彼は複数の版をつくっている。当然のことながら，改訂版は多少とも内容が変化しており，その中に彼の思考や心境の変化を反映した記述も含まれている。各著作の改訂版は重要な情報を提供してくれる可能性をもっている。そこで，本稿に始まる3つの拙稿では取り上げる著作についてギラルドゥス自身の改訂版をそれとして検討し，内容の変化を確認することにした。

以上の2点をまとめると，本稿が注目する時期は『アイルランド地誌』が構想されたと推定される1185年から，『ウェールズ案内』に対するギラルドゥス自身の改定が最後に行われた1215年までとなる(18)。

以下本節では，ギラルドゥスの生涯をいくつかの時期に分け，各時期に彼がどのような活動をし，何を考えていたか，後者については推測も含めて紹介する(19)。

一般的に言って，生涯目標に注目しながら一生を追うのであればその目標を設定した時から紹介を始めるのが自然であろう。しかし，ギラルドゥスの生涯目標は彼の出自と深くかかわっており，むしろ，出自を前提としてつくられている。そこで，まず彼がどのような血統に属していたのか簡単に説明しておこう。

ギラルドゥスは1145年か46年に南西ウェールズ，マノルビェ（Manorbyr）城で城主の末子として生まれた。父は半世紀ほど前に南東ウェールズに侵入・定着したあとマノルビエに移ってきたアングロ・ノルマン貴族であった。母は，同様な経過によって南西ウェールズに大きな勢力を築いていたアングロ・ノルマン貴族ジェラルド一族（Geraldins）の血と南西ウェールズの古い王家の血を引いていた。したがって，ギラルドゥスは均等ではないが南ウェールズで対立している2大勢力の血統に属していたわけで，これを私は出自の二元性と呼んでいる。

出自の二元性は彼により広い意味での二元性を与えた。彼は成人後2大勢力の代表者たちと親しく接し，しばしば両者の仲介役を務めているが，こうした活動を可能にする基本的条件は生来のものであった(20)。

ギラルドゥスはもの心のつく頃から聖職にあこがれ，周囲の人たちも彼の適性を認めて積極的に支援した。聖職に就くために必要な条件は充分整っていた。彼は卓越した知力をもっていたが，それだけでなく，伯父デイヴィド（David）がセント・デイヴィズ（St. David's）司教であるという恵まれた環境をもっていたからである。彼は単に聖職を目指

しただけではなく，早くからセント・デイヴィズ司教になることを念頭においていたようで，のちにこれが彼の第1の生涯目標となる。

1165年から75年にかけてパリに留学したギラルドゥスはリベラル・アーツを熱心に学び，同時に新しい教会の理念を修得した。帰国に際して彼は南ウェールズの教会改革と取り組むという決意を表明しており，留学中に自分が聖職者として何をすべきか熟考したと推定される。この当時南ウェールズの聖界はローマ教会が定めたルールを拒否する姿勢を示していたが，これは新しい教会理念を学んだギラルドゥスからすれば堕落した，ぜひとも改革すべき状態であった(21)。また，改革をうまく進めることができれば，南ウェールズ聖界の支持を得て，セント・デイヴィズ司教に就任する道が開かれるという目算を立てていたと思われる。

後の行動から判断すると，彼はセント・デイヴィズ以外の司教職を念頭においていなかった可能性が高い(22)。同教会がウェールズの中で最も古い権威をもっており，故郷の教会だったからであろう。

ギラルドゥスの第2の生涯目標は文筆家としての名声を得ることであった。この時期の多くの文筆家と同様に，彼は聖職者の仕事と文筆活動とを並行して進めている(23)。後述のように彼は王に政治的任務を命じられることがしばしばあり，そうした場合には王の仕事を優先しているが，一段落すれば聖職者・文筆家の生活にもどっている。また，第1目標であるセント・デイヴィズ司教就任に失敗した時にはいつも研究，著述の世界に引きこもろうとしている(24)。晩年になると彼は著述が自分の本来の仕事であり，聖職者としての対外的な活動は，任務ではあっても，自分の意にそうものではなかったと述べている(25)。活動期の彼が同様に考えていたのかどうか確認できないが，彼が生涯を通じて文筆家の名声を望み，努力していたことは間違いない。

ギラルドゥスの生涯を概観すると，もうひとつ彼が目標としていたことが浮かび上がってくる。それはセント・デイヴィズ教会の大司教座権回復である(26)。少し説明しよう。

イングランド王権は12世紀初頭にウェールズ征服を計画し，チャンスがあればウェールズ各地に侵入，定着を進めていたが，これと並行してウェールズ聖界をローマ教会のルールに従って再編し，カンタベリー大司教の管理下に置く努力が重ねられていた。セント・デイヴィズ教会は11世紀末までウェールズ聖界で最大の権威を誇っていたから，こうしたイングランド側の動きを強く警戒し，対抗策を講じた。例えば，聖デイヴィッドの伝記を創作し，本来セント・デイヴィズ教会は大司教座権をもっていたが，彼がなくなった後異教徒の侵入を受けた際にこの権利を他の教会に委譲した，と書き込んでいる(27)。

ギラルドゥスはこうした事情を知っていたが，少年期はむろん，パリ留学後南ウェールズで活躍している時期でもほとんど関心を寄せていない。彼がセント・デイヴィズ教会の

大司教座権をそれとして取り上げたのは，後述のように「セント・デイヴィズ問題」を提起した時であり[28]，「問題」で敗北が決まると，カンタベリー大司教から大司教座権の主張を禁じられたこともあって，まったく言及しなくなる[29]。

以上から分かるように，ギラルドゥスの第3の目的は時期的に本稿が取り上げる『アイルランド地誌』第1版とずれている[30]。しかし，第2版をつくった時にはこの目標を掲げて敗北した記憶が鮮明に残っていたはずで，それが改定内容に反映していないかどうか確認する必要がある。

ギラルドゥスは上記3種類の目標をどのように達成しようとしたのか，また，彼は上述のように出自の二元性ゆえにイングランド勢力とウェールズ勢力のいずれとも連携する可能性をもっていたのだが，そうした政治的二元性はどのような形で発揮されたのか，いくつか時期を区分して紹介しよう。紹介は彼が明確な生涯目標を立てた時から，すなわち，彼が10年にわたるパリ留学を終えた1174年から始めるのがよい。なお，この時点で彼は上記第3の目標はもっていなかったから，第1，第2目標がまず問題となる。

パリ留学終了までにギラルドゥスは次のような計画を立てていたと私は推測している。①留学中に学んだローマ教会の新しい理念や組織に照らすと，故郷南ウェールズの教会は著しく遅れており，改革が必要である。帰国して自分がこの改革を遂行する[31]。②改革はカンタベリー大司教の権力を利用して上から進める[32]。③改革遂行のためには自分の出自の二元性を活用し，イングランド，ウェールズ双方の支配者層に働きかける[33]。④セント・デイヴィズ教会の支援も不可欠であるが，ここには司教である伯父デイヴィッドをはじめとして自分の後ろ盾となる人々が多い[34]。⑤改革に成功すれば，自分に対する評価が高まり，セント・デイヴィズ司教への道も開かれるはずである[35]。

以上の推測が大きく間違っていないとして，ここに見られるギラルドゥスの政治的スタンスはどのようなものか検討してみよう。

彼は上記のように出自の二元性をはっきり自覚していたが，彼自身にとってこの二元性は決して矛盾するものではなく，むしろ，状況や相手によって使い分けできるものであった。彼は出自の二元性を自然に受け入れ，もっぱらプラス面を見て楽観的に将来を展望していたと思われる。

ただし，彼のスタンスは決してバランスの取れたものではなかった。当時の南ウェールズの政治状況は長期的に見ればイングランド勢力優位に推移しており，ウェールズ人勢力の頂点に立つリース・アプ・グリフィズ（Rhys ap Gruffudd）もヘンリ二世に繰り返し忠誠を誓っていた[36]。また，なによりもギラルドゥス自身がアングロ・ノルマン貴族の子弟として育てられ，イングランド勢力の支配者たちとの交流が深かった。したがって，ギラルドゥスは自分の意志とは別に，周囲の状況に押されて，イングランド側により大き

な比重を置くスタンスをとっていた。この点は周囲の人々もよく承知していたが，南ウェールズのイングランド側，ウェールズ側双方の事情に通じ，双方の信頼を得ている人材はごくまれであったから，彼は仲介者として活躍できたのである。パリ留学後南ウェールズの教会改革で目覚ましい成果を挙げたのも，彼が自分の二元性を自然な形で生かし，生来の能力を最大限に発揮できたからであろう(37)。

しかし，間もなくひとつの事件が契機となってこの幸せな状況は終わり，ギラルドゥスはそれまで進めてきた計画を根底から考え直す必要に迫られた。まず，セント・デイヴィズ司教であった伯父デイヴィッドの死去（1176 年）にともない，ギラルドゥスが次期司教の最有力候補に推されたにもかかわらず，ヘンリ二世は手続きの不備を理由に全候補を却下した(38)。次に，彼が拒否されたのは司教の任命権をもつ王が彼を強く忌避したからだという真の理由が判明した。王は，ギラルドゥスが南ウェールズ聖界の頂点に立てばウェールズ人支配者たちと提携するだろう，そうなればイングランド王権のウェールズ征服計画にとって大きな障害になると危惧していたのである(39)。彼がこの情報を第 2 回パリ留学前に入手していたかどうかはっきりしないが，自分が拒否された真の理由を知って事態の重要さに驚いたことは容易に想像できる。それまで彼は自分のメリットであると考えて活用してきた出自の二元性のうち，一方の柱であるウェールズ人支配者たちとの関係がマイナスの要因とされているからである。しかも，血統は変更不可能であるから，王の判断が変わらない限り彼はセント・デイヴィズ司教になれない。司教となって文筆の才能を存分に発揮しようという彼の生涯計画が根底からくつがえる事態である。

理屈を言えば，この時点で彼にはいくつかの道が開けていた。最も大きな転換は司教の地位をあきらめ，一生ブレコン大助祭として地道に職務を続けることである。しかし，人並み以上の向上心と自尊心をもつ彼がこうした挫折の道を自発的に受け入れるはずがない(40)。次に，セント・デイヴィズ司教は諦めて，他の司教職に就く道もあった。実際この後彼はアイルランドの 2 つの司教職，さらに南ウェールズのサンダフ（Llandaff）司教職に就くよう誘われている。しかし，彼はいずれもはっきり断っている(41)。セント・デイヴィズ司教職は彼にとって特別の地位であり，生涯の目標であった。ヘンリ二世の意向が分かった後も，彼は当初立てた目標を変えなかったのである。

そこでギラルドゥスは，おそらく第 2 回パリ留学中に熟慮を重ねた結果であろう，自分を危険視する王の認識を改めるという第 3 の道をとることにした。これまでの彼は生来の二元性をそのまま生かしてイングランド勢力とウェールズ人勢力の間に立って活動していたのだが，あえて親イングランド的姿勢を強調し，自分がいかに忠実かつ有能な王の家臣であるか実証する戦略を選んだのである(42)。

留学から帰国するとギラルドゥスはさっそく新しい戦略を試す機会に恵まれた。彼の留

学中にセント・デイヴィズ教会で司教ピーターと他の主要メンバーとが対立し，司教が教会を長期間離れるという事態が発生していたが，この混乱を収めるようカンタベリー大司教から依頼されたのである。ウェールズへもどったギラルドゥスは非がピーターにあると判断し，教会の利益を第一とする政策を強力に推し進めた。教会メンバーの信頼は彼に集まり，ピーターを実質的に排除した形で教会秩序が回復された(43)。

ヘンリ二世もギラルドゥスの有能さを改めて認識したのであろう，この問題が収まった後しばらくして，1184年に彼を王宮付き司祭に任命し，対ウェールズ政策で重用することにした。ギラルドゥスはここでも忠実かつ熱心に任務を遂行している(44)。彼は混乱していた南ウェールズの政治状況を改善するために，王の命令でしばしばイングランド王宮の人々をウェールズ人支配者たちに引き合わせた。また，王子ジョンが率いるアイルランド遠征に随行して，同地に定着していたアングロ・ノルマン貴族たちとの連携を図った。さらに，カンタベリー大司教ボードウィン（Baldwin）が十字軍参加勧奨のためウェールズ各地をめぐった際，巡行を先導し，行く先々で大司教を各地のウェールズ人支配者たちに紹介している。いずれも仲介者的な役割であるが，あくまでも王に命じられて，王権のウェールズ，アイルランド支配のために行っている。

当然のことながら，ギラルドゥスが命じられた任務にはウェールズ人勢力の利益に反するものが含まれていた。その代表的事例がボードウィンに随伴したウェールズ巡行である。十字軍勧奨のためとはいえ，イングランドの大司教がウェールズ各地の主要な教会を訪れてミサを主催すれば，それはウェールズの教会が大司教の支配下にはいったことを示すと理解される可能性が高い。ギラルドゥスもこの点を充分知っていたが(45)，それでも彼は積極的に巡行を先導し，熱心な説教を繰り返している。彼はこの時，ウェールズ人支配者たちの信頼を失っても，王に自分がいかに忠実かつ有能な家臣であるか訴えたかったのであろう。少年期から自覚していた自然な二元性のバランスを崩しても，今が自分を危険視する王の認識を改めるチャンスだと考えていたのではなかろうか。

おおまかに言って『アイルランド地誌』に始まる4著作は，このようにギラルドゥスが内部に矛盾をかかえ，その解消のために必死の努力を続けていた時期に構想，執筆されている。彼は出自によって親イングランド的側面と親ウェールズ的側面を併せもち，ヘンリ二世が自分を危険視しているという情報に接するまでは，2つの側面のバランスを状況に応じて変えながら自然にコントロールしていた。それに対して，王宮付き司祭の時期には2種類のバランス，すなわち，自分にとって自然な生来のバランスとイングランド王宮向けに意図して変えたバランスとを使い分けようとしている。私はこうした著者自身の複雑な状況が4著作それぞれに反映している可能性が高いと考えている。

しかし，ギラルドゥスが選んだ矛盾含みの状況は1189年にヘンリの死去とともに終わ

った。無理してまで忠実さを誇示する相手がいなくなったからである。彼が王宮を離れたのも当然であろう。ヘンリに次いで，ウェールズ人勢力を率いていたリース・アプ・グリフィズも 119 年に死去した。2 人の死去でギラルドゥスが生来の二元性を駆使して活躍する場もなくなった。彼はこれまでよりは自由に，しかし，主要な後ろ盾を失った状態で自分の生涯目標を再検討する必要に迫られた。私はこの検討がヘンリ二世の死後すぐに始まったと推測している。

数年後にギラルドゥスが全面展開して見せた戦いから判断して，この時点で彼が考えていたことを次のように整理してよいであろう。①セント・デイヴィズ司教になるという目標は保持し，そのための新しい作戦を立てる。②イングランド王から高い評価を得て目標を達成する道は捨て，王よりも高い権威によって，具体的にはローマ教皇の聖別を受けることで司教となる道を探る。③しかし，教皇の関心を辺境ウェールズに向けることは容易ではない。そこで，かつてセント・デイヴィズ教会がもっていたと言われる大司教座権の復活を教皇に要請する。④セント・デイヴィズ教会はかねてよりこの願望を表示しているから，教皇への要請は同教会の支持を得る強力な手掛かりとなる。

以上 4 点から分かるように，彼は後ろ盾をセント・デイヴィズ教会とローマ教皇に求める一方，これまで仕えてきたイングランド王宮とあえて対決する覚悟を決めたのである。大司教座権の復活を彼が生涯目的に組み入れたのは，これまでの方法が目的達成に役立たないと分かった後であり，しかも，目的というよりも手段に近い位置づけになっている。彼がセント・デイヴィズ教会の大司教座権復活を真剣に考えたのは事実であるが，一時期のことに過ぎない。

彼の新しい作戦は 1189 年に司教ピーターが死去するまで伏せられていたが，次期司教候補の選出作業が始まると直ちに行動が起こされた。ギラルドゥスとセント・デイヴィズ教会の主要メンバーはよく連携し，時期を失うことのないよう次々作戦を進めている(46)。両者の間で充分に事前の打ち合わせが行われていたのであろう。

セント・デイヴィズ教会はまずギラルドゥスを筆頭とする候補者リストをイングランド王宮に提出した。当時王リチャード一世はフランス滞在中で，しかも間もなく不慮の事故で死去したこともあって王の正式回答は大きく遅れたが，結局新王ジョンは，カンタベリー大司教ウォルター（Walter）の助言に従って，ギラルドゥスを司教に選定しないという決定をした。回答を得たセント・デイヴィズ教会は直ちにこの問題をローマ教皇インノケンティウス三世に訴え出て裁定を求めることにした。教皇の権限でギラルドゥスを司教に任命してくれるよう請願したのである(47)。

教皇の面前でセント・デイヴィズ教会を代表するギラルドゥスと大司教ウォルターの使者が，ギラルドゥスは教会が正式に決めた司教候補であるか否かをめぐって対立した。教

皇は双方の間に立つ裁定者として会議を主催した。

教皇インノケンティウス三世は当初はギラルドゥスに好意的な態度を示し，第 1 回裁定会議の終了時点でギラルドゥスが作戦成功と考えても不思議ではない状況が生まれた(48)。しかし，第 2 回会議以降ギラルドゥスは現実の厳しさを思い知らされる。教皇はギラルドゥスの掲げた理念に好意を示したが，一貫して政治的利害を優先した。たとえば，イングランド王とのよい関係を失わないために，王権の利益を損なうような裁定を下さないと述べた手紙を密かに王に送っていた。また，ウォルターはセント・デイヴィズ教会内に反ギラルドゥス派をつくり，彼らを教会の代表者としてギラルドゥスの主張をくつがえす証言をさせた(49)。ギラルドゥスは裁定を遅らせる教皇の会議運営と偽証を辞さない教会代表者たちの発言に悩まされたあげく，教皇から司教候補の選出をやり直すようにという裁定を得た。ギラルドゥスにとってこれは実質的に敗北であった。セント・デイヴィズ教会内に築かれていた親ギラルドゥス派は大司教の工作によってほとんど消滅し，同教会を動かす有力な手段であった大司教座権の復活要請は教皇の検討対象ともされずに終わったからである。

こうして生涯最大の事件に決着がつくと，ギラルドゥスはすべての後ろ盾を失い，しかも，王ジョンから「王国の敵」と宣告されていた。もはや全面降伏をしてカンタベリー大司教に忠誠を誓い，宣告撤回を願い出るほかない。彼はブレコン大助祭の職と禄を失い，セント・デイヴィズ教会の大司教座権回復はむろん，自らの司教就任も完全に諦めて余生を送ることになる(50)。この時期の著作には，なぜ豊かな才能をもつ自分がこのように冷遇されるのかという強い疑問や恨みが繰り返し記されている。生涯目標の中で文筆家の名声を得る道は残されていたが，失意の状態からよい作品が生まれるはずもなかった。最晩年の著作を見ると，将来への展望や計画は完全に姿を消し，今や無意味となった自己顕示ばかりが目立っている。

ギラルドゥスはブレコン大助祭の職を辞した後もしばらくは，文筆家として生活できる経済的基礎を確保していた。辞職の見返りに，ギラルドゥスの甥（同名のギラルドゥス）を後任者とし，大助祭の職禄を 2 人で分けるという提案が大司教からなされ，彼が受け入れたからである。しかし，甥はまもなく職禄を全て自分のものとする動きを始め，1208 年から 11 年にかけて両者の間で激しい口論が交わされた(51)。甥は新しいセント・デイヴィズ司教の支援・指示を受けているので，この「問題」は単なる肉親間での財産争いではなく，南ウェールズ聖界における権力争いの側面ももっていた。また，職禄分配に関する大司教の提案はいわば裏の口約束であったから，公的には甥の主張が正当であった。となれば争いの帰趨は明らかで，ここでもギラルドゥスは完全に敗北した(52)。1211 年以降 22 年か 23 年におそらくリンカーンで死去するまでのギラルドゥスを具体的に知る手掛かり

はほとんど残されていない。

Ⅲ　『アイルランド地誌』－史料と内容

ギラルドゥスはいつ『アイルランド地誌』の構想を得たのか記していないが，1186年5月に王子ジョンのアイルランド遠征に随行したことが直接のきっかけになった可能性が高い。彼は遠征軍が帰国した後も翌年までアイルランドにとどまって調査を続けたと『自叙伝』に記しており(53)，『アイルランド地誌』はこの時期に書き始められたと推定されている(54)。また，1188年3月までに完成していたことが分かっている。第1版はヘンリ二世に献呈されている。

献呈に先立って1187年か88年に彼はオックスフォードで同書の朗読会を3日間開いた。初日はオックスフォードの貧しい人々のために，2日目は広く最も優れた学識者を集めて，最終日にはその他の学者，騎士，市民の面前で彼自身が読み上げている(55)。おそらくそれぞれの聴衆層の知識や興味に合わせて選んだ部分を披露したのであろう。

『アイルランド地誌』は彼の自信作であった。この点は彼が最高権力者である王に献呈し，また少し後にはカンタベリー大司教ボードウィンにも贈呈していることからまず間違いない。この時期の彼は王や大司教の自分に対する評価を大変気にしており，同書が自分の評価を高めるという自信がなければ贈らなかったはずである。実際ボードウィンは同書を大変気に入ったようで，ギラルドゥスは大司教がテーマの取り扱いや文体をほめてくれたと記している(56)。

この著作は決して大部ではない。しかし，後に紹介するように内容は多岐にわたり，資料収集は決して容易ではなかった。ギラルドゥスは「島の居住者や諸種族の起源に関して」アイルランドに伝わる古い年代記を参考にしたのを除けば，他の部分は全て自力で書き進めたと記しており(57)，文書以外の資料は現地で聞き取りをしたと推定される。その大部分は，半世紀ほど前にウェールズからアイルランドに遠征して，そのまま定着していた縁者ジェラルド一族から得たのであろう。アイルランドについて語るのであれば，アイルランド人から聞き取りをするのが本来の情報収集方法であるが，彼がこうした努力をした形跡はない(58)。

『アイルランド地誌』のマニュスクリプトは28点現存するが，いずれも写本であって，オリジナルは失われている。ただ，現存最古のマニュスクリプトは同書の完成後間もなく，少なくとも彼が活躍していた時期につくられたと推定されているので，オリジナルの内容

を正確に継承している可能性が高い[59]。28点を作成年代で区分すると，12世紀末に書かれたものが1点，13世紀のマニュスクリプトが14点，14世紀，15世紀，16世紀，17世紀のものがそれぞれ5点，2点，5点，1点である。12，13世紀のマニュスクリプトが過半を占めているのは，発表後『アイルランド地誌』が，ほかにアイルランドの事情を伝える著作がなかったこともあって，この地の征服を目論んでいたイングランド王宮で関心を集めたからであろう。

『ギラルドゥス・カンブレンシス著作集』第5巻で『アイルランド地誌』の校訂を行ったディモック（Dimock，F. J.）は現存マニュスクリプトを4つの版に分類した[60]。さらに，バートレット（Bartlett，R.）がディモックの分類を受け継ぎながら，彼の挙げたマニュスクリプトとそれ以後に確認されたものを合わせて28点のマニュスクリプトを再整理している[61]。以下このバートレットのマニュスクリプト表から本稿の議論に必要な部分を紹介する。

第1版に属するのは次の4点である[62]。

⑴Cambridge University Library Mm，5. 30（12世紀末）［ディモックのMマニュスクリプト］

⑵Perterhouse 181（15世紀）［Pマニュスクリプト］

⑶St. Catherine's College L. V. 87（13世紀）

⑷British Library，Harleian 3724（13世紀）［Hマニュスクリプト］

第1版が完成したのは上記のように1188年3月以前で，完成の直後か少し前に彼がオックスフォードで朗読したのはこの版である。したがって，この版には，王宮付き司祭として活躍していた時期のギラルドゥスの思考が直接反映している可能性が高い。処女作『アイルランド地誌』の第1版は，アイルランド・ウェールズ関係4著作の検討にとっていわば出発点となる重要性をもっている。

第2版は次の5点で，この版はヘンリ二世が死去した1189年7月以前に完成している[63]。

⑸Cambridge Corpus Christi College 400（13世紀）［Cマニュスクリプト］

⑹British Library，Add. 44922（13世紀，不完全）

⑺British Lbrary，Add. 34762（13世紀，第1版と第2版の中間的内容）

⑻Westminster Abbey，no. 23（13世紀）［Wマニュスクリプト］

⑼Oxford Bodleian，Rowlinson B. 483（13世紀）［Bbマニュスクリプト］

第3版に属するマニュスクリプトは4点現存しており，いずれも13世紀のものと推定されている[64]。ただ，これらの版の改定が13世紀のいつころなされたのかバートレットは記していない。第2版と同様にギラルドゥスの生前に行われたのであれば彼自身の手が

加わっている可能性があるが，彼が1220年ころまでに文筆活動をやめていることを考えると，彼の死後他の筆写生によってつくられた版と想定するほうがよいだろう。そう考えて，本稿では第3版を検討の対象から除くことにした。

第4版のマニュスクリプトは2点で，13世紀と14世紀のものと推定されている(65)。また，これより後に作成されたマニュスクリプトが20点あり，中に13世紀のものと推定されるものが3点あるが，いずれも大きな欠落があり，どの版に分類するのがよいかはっきりしない(66)。第3版と同様な判断で，第4版以降のマニュスクリプトも本稿では取り上げない。

ディモックの校訂本は今日でも最も権威あるテクストと見なされている。彼は校訂本作成に際して次のような編成方針を立てた(67)。①4種の版の中で最も古い第1版を基に校本をつくる。具体的にはマニュスクリプトM（上記(1)）を底本とする。②これに他のマニュスクリプトからの補充を行う。具体的には，まず第1版に属するHマニュスクリプト（上記(4)）とPマニュスクリプト（上記(2)）から，底本マニュスクリプトにない文章や語句を加える。次に，同様な方法で第2版のマニュスクリプトからの補足を，マニュスクリプトC（上の(5)），Bb（上記(9)），W（上記(8)）の順に行う。最後に第3版のマニュスクリプト4点からも補足する。

以上の編成方針から分かるようにディモックの校訂本は13世紀までの間に書かれたマニュスクリプトに含まれるすべての記述を集めて，整合的に配置したものである。しかし，実質的には，彼の校本は2点ないし3点のマニュスクリプトからつくられたと言ってよい(68)。実際，上で紹介した第2，第3段階での補充はさほど多くなく，内容的にもまったく新しいものは少数にとどまっている。特にアイルアンドに関する記述はほとんどすべて第1版に含まれている(69)。

以上のような史料状況を念頭に置きながら，本稿は原文についてはディモックの校訂本を利用し，原文読解の手がかりとして同じ校訂本を基にした有光氏の和訳を参照することにした(70)。ディモックの校訂本から第2，第3版の補足部分を取り除き，これを英訳した第1版『アイルランド地誌』をオミナ（O' Meana, J. J.）が出版しており(71)，発表当時の記述を簡単に確認できる点で便利である。ただし，実際に彼の英訳本と有光氏の和訳を比較してみると，アイルランドに直接言及する部分では両書に差はない。本稿の目的はギラルドゥスがアイルランド人・社会をどのように描き出しているか，その背後にどのような執筆意図があったのかを探ることにあるのだから，内容がより豊かなディモックの校本と有光氏の和訳を利用するのが自然である。

以上の史料状況と校本編成の事情から2つの重要な点を指摘しておこう。

第1に，『アイルランド地誌』はいくつもの版を重ねているが，ギラルドゥス自身の手

になるものに限定すれば重要な改定はほとんどなされていない。彼の判断では，最初から完成度の高い作品だったのである。というのも，ギラルドゥスは多くの著作で一度完成して発表したものに繰り返し手を入れており，その結果内容に重要な変化が生じている場合が少なくない(72)。この点で『アイルランド地誌』はむしろ例外である。

第2に，ギラルドゥスの手になる2つの版の完成時期が接近していて，ともにヘンリ二世の在位中である。前節で説明したように，王宮付き司祭に就任した時からヘンリ二世が死去するまでギラルドゥスは一貫した生涯目標を立て，ゆるぎなく努力を重ねていた。そうした時期に『アイルランド地誌』が構想され，完成されたことは，同書を読み解く際の重要な手掛かりとなる。

本節後半では『アイルランド地誌』の構成と大まかな内容を紹介する。同書をよく知る人にとっては無用のことであるが，次節で取り上げる個別史料がどのような構成や文脈の中に位置しているのか確認するのに役立つであろう。

ディモックの校本に従うと，『アイルランド地誌』は2つの序文と本文から構成され，本文は，それぞれ序文をもつ3つの部分に分かれている。第1部はアイルランドの自然を，第2部はこの地に見られる驚異を取り上げ，第3部ではアイルランド人・社会の特徴と彼らの歴史が中心的内容となっている。3部を通じてアイルランド以外の地域への言及は少なく，特に第1版ではアイルランドへの集中度が高い。第2版で追加された記述の多くは他地域に見られる近似例の紹介や古い著作への言及である。

第1序文は，当然のことながら本文の前に独立して置かれており，「朗読の［ための］序文(73)」と題されている。上記のようにギラルドゥスはオックスフォードで朗読会を開いており，そのために用意した文章である。ここで彼は，まず一般的に文筆家が著述に取り組む目的として名声と主君の報酬を挙げ，前者が何よりも重要と言いながら，後者について最近期待がかなえられない場合が多いと嘆いている。次に，この書でアイルランドを取り上げた理由について，アイルランドについて網羅的に紹介する著作がこれまでなく，この「さい果ての地の位置や特徴をせめて人づてにではあれ把握して，古来あまり知られていないその独自性をあきらかに(74)」したいと説明している。

もうひとつの序文はディモックの校訂本では本文第1部の冒頭に置かれている。ただし，ディモックはこれを第2の序文と名付けており(75)，内容的に全体に対する序文であることは間違いない。したがって，有光訳のように第1序文に次いで，すなわち，3部からなる本文に先立つ位置づけをするのが正しい。内容はヘンリ二世に対する同書献呈の辞と王の一族を称える文章である。2つの序文の内容を比較してみると明らかであるが，ギラルドゥスが本来の序文として書いたのは第2序文である(76)。

本文の第1部は「アイルランドの自然に関する記述」であり，40章に分かれている(77)。大変細かい章立てで，しばしば同じ性格のテーマが何章かにまたがって取り上げられているので，以下ではそうした章をまとめて，ごく簡潔に紹介する。

第1，第2章：アイルランドの地理的位置。

第3章：こまでの文筆家が記しているアイルランド。

第4～第6章：アイルランドの自然がもつ一般的な特徴。

以上がアイルランドの自然に関するいわば総論である。第7章からは各論となる。

第7，第8章：アイルランド各地の湖と川。

第9，第10章：アイルランドの湖や川に住む各種の魚。

第11章～第19章：アイルランドに住む様々な鳥。逆にこの地には見られない鳥。

第20章：蝉。

第21章～23章：アイルランドの鳥。（続き）

第24章～第27章：アイルランドに住む野獣とその特徴。

第28章～第31章：アイルランドに見られる爬虫類とその毒。

第32章：最近アイルランドで発見された蛙。蛙は本来この地にいなかった。

第33章：この島のよい点。自然はマイルドであり，病気は少ない。適当な天候変化があるため人々の活気が保たれる。

第34章～第40章：アイルランドと東方の国々との比較。自然条件，生物の差異。アイルランドは東方よりも恵まれている。

第2部はアイルランドの「驚異と奇蹟に関する記述」であり，序文と55章に分かれた本文とで構成されている(78)。

第2部の序文でギラルドゥスは，これまで多くの著述家が世界各地に見られる驚異について語っているが，これにアイルランドの事例を加えるのは意義あることだと述べ，この書には現地の人々の証言で真実と確かめられたもののみ取り上げたこと，驚異もまた神の御業であることが強調している。

第1，第2章：アイルランドの海に見られる驚異の現象。

第3章：海をはじめとする液体を動かす月の力。

第4～第6章と第9章：不思議な力や現象がみられる島々。

第7，第8章：驚異の泉。

第10章：金の歯をもつ魚と鹿。

第11～第14章：アイスランドなど北方の島々に見られる驚異。

第15～第17章：マン島など西方の島々の驚異。

第18章：「巨人族の舞踏」と呼ばれる巨大な積み石とその運搬。

第 19～第 27 章：現代になって発見された驚異。多くは異常な動物。

第 28～第 37 章：聖人たちの奇蹟。

第 38，第 39 章：聖ブリギットの時代につくられた「驚くべき本」と神の力。

第 40 章：アイルランド各地の，聖人たちに由来する避難所と神の加護。

第 41 章～第 54 章：ダブリンの十字架がもたらした奇蹟など，不思議な出来事。

第 55 章：アイルランドの聖人に見られる強い復讐心。

テーマが驚異や奇蹟であればむしろ当然なのかもしれないが，第 1 部に比べて第 2 部の構成は散漫で，雑多な話題，それも，真実とは考え難い話の寄せ集めという印象が強い。ギラルドゥスや同時代の人々は真実と信じ，細かい事項に大きな興味をもったのであろうが，本稿のように記述内容を彼の思考や行動を探る手がかりにしたいと考える場合には，第 2 部は利用が難しい。

「この地の住民に関する記述が始まる」と題された第 3 部も序文と 54 章からなる本文で構成されている(79)。

序文でギラルドゥスは，「この作品でいっそう価値ある部分(80)」第 3 部ではアイルランドの住民，習俗・習慣，歴史を取り上げると述べている。本稿にとって最も重要な部分であるから，第 1，第 2 部よりも詳しく紹介する。

第 1～第 7 章：アイルランドに到来した人々の歴史。アイルランドのもっとも古い史書によれば，大洪水前にノアの孫娘カエサラの率いた移住を端緒として 5 回にわたり各地から移住が行われた結果今日まで続くアイルランド人が形成された。初代のアイルランド上王はスラニウスであった。第 5 回移住後，その引率者であったヘルモンがアイルランド人最初の上王となった。

第 8～第 9 章：『ブリタニアの歴史』によれば，アイルランドの歴史はブリトン人の王グルグンティウスがバスク人の入植を許したことから始まった。したがって，ブリタニア王はアイルランドの支配権を古くからもっていたことになる。また，ローマ教皇はヘンリ二世にアイルランドの征服と支配を特別に許している。

第 10 章：アイルランド人の特徴，暮らしぶり。アイルランド人の生活は文明度が低く，牧畜中心の経済を営んでいる。「彼らの習慣はどれもまったくもって野蛮」である(81)。

第 11 章：アイルランド人は楽器演奏に優れている。

第 12～第 15 章：音楽の恩恵。和声の発明。優れた楽器製作者。音楽という語。

第 16～第 19 章：アイルランド人の信仰の歴史。パトリキウスによる改宗。4 つの司教座創設。アイルランド人はキリスト教信仰の基本を知らない。

第 20～第 25 章：アイルランド人の悪しき性格。彼らの不正，不誠実，不見識，策略。

彼らは「不誠実という点でのみ誠実である[82]。」また，彼らは戦時には無力で，平時には不誠実である。アイルランド人の特異な婚約や養子縁組。王権を確認する際に用いる異常な方法。

第 26 章：アイルランドにはキリスト教の教義を知らず，遵守しない人が多い。

第 27～第 32 章：アイルランドの聖職者たち。一般的に彼らは敬虔，貞潔である。しかし，高位聖職者は司牧の勤めを怠り，瞑想にふける。司教は修道院から選ばれる。修道士と在俗聖職者との違い。人々は高位聖職者を尊敬する。

第 33，第 34 章：アイルランドの聖遺物。中でも聖人の杖は尊重される。

第 35 章：アイルランドには身障者が多い。

第 36～第 47 章：パトリキウスの時代から今日までアイルランドを支配した王たち。北方の人々の来島。グルムンドゥスによる征服と支配。ヘンリ二世のアイルランド征服。

第 48～第 54 章：ヘンリ二世と王子たちの賛美。ヘンリ二世のさまざまな功績と勝利。王子たちの功績と長所。王と王子の対立，また，王子間の不和。

以上の紹介から『アイルランド地誌』が地誌にふさわしい内容を充分もっていることは明らかであろう。緊密な論理構成をもつとまでは言えないが，全体としてよくまとまった著作である。

Ⅳ　『アイルランド地誌』－執筆意図

ギラルドゥスは『アイルランド地誌』をどのような意図で構想したのか，彼の記述を基に推定してみよう。一般に筆者の意図が端的に記されているのは序文であり，この著作でも 2 つの序文が重要な手掛かりを与えてくれる。

ギラルドゥスが執筆意図をそれとして明記しているのは第 1 序文「朗読の［ための］序文」である。

(1) 人生がどうなるかはっきりわからぬ中で，この世に素晴らしい形見を残し，長く語り継がれる名声をあげ，はかない生を終えた後もせめて世人の記憶の中に生きる可能性を持つことを報酬と考えて，そうなるように意を傾けて努力した人々がいる。生をじつに短くはかなく思う私は，彼らの意図を立派だと思う。・・・・

文豪たちにとってこれはものを書く第 1 の理由だった。だが，その次にあげられるものもある。それは，気高い君公の報酬であり，奨励である。・・・・

［しかし］，ものを書くこの第2の理由は見られなくなってすでに久しく，［その結果］詩歌の道もおとろえ始めた。ただ詩が絶え滅びたのではないし，哲学の命脈が尽きたわけでもない。輝かしい出来事を語るすばらしい記録が価値をなくしたわけでもない。じっさいには文学がなくなったのではなく，学識ある君公がいなくなったのであり，学芸がなくなったのではなく，それが盛名を失っただけである(83)。

ここに記されている2つの目的をどのように理解したらよいか，推測も含めて検討しておこう。

第1の目的は著述家の常套句とも見えるが，私は彼がここで具体的な意図をもち，感情を込めていたと判断する。まず，ギラルドゥスは早くから聖職者の栄達と文筆家の名声を目標と定め，真剣な努力を重ねていた。次に，『アイルランド地誌』は彼の処女作であり，名声が得られるかどうか，将来を占う最初の機会であった。したがって，彼の挙げる文筆家の第1の目的は，そのままこの当時の彼にとっても有力な動機であったと考えるのが自然である。

第2の目的についても彼は特別の思いを込めていた可能性が高い。第2節で説明したように，ヘンリ二世に仕えていたギラルドゥスは王の一方的な思い込みゆえに自分がセント・デイヴィズ司教に就任できないことを知っていて，この大きな障壁を何とか乗り越えるために王に自分の献身ぶりを誇示していた。『自叙伝』の中で彼は，王宮付き司祭就任に際して王が明確にではないが相当な報酬を約束したと言っており(84)，最終的に王の約束は果たされずに終わったが，まだこの時期の彼は希望を失っていなかった。(1) の「君公の報酬」で彼はセント・デイヴィズ司教職を思い浮かべていたのではなかろうか。とすれば，『アイルランド地誌』をヘンリ二世に献呈したのも，単に自分の主君だからではなく，生涯目標を達成するための戦略だった可能性が生まれる。

第1序文には内容にかかわるより具体的な執筆意図も記されている。それはこれまでほとんど紹介されることのなかったアイルランドについて著述することである。

(2) 誰もこれまで書いていない，あるいはひじょうにわずかな者しか述べていない新しい話題で，私は読者の心を刺激したいと思う。そして，アイルランドの地誌をこの小作品で曇りのない鏡のように写し描き，全てに人の益となるように示したい(85)。

(3) さい果ての地の位置や特徴をせめて人づてにであれ把握して，古来あまり知られていないその独自性を明らかにすること。有力者を飾り，また，無力なものが利用するように自然が生んだものの本性をおおむね明らかにし，この地にないものもはっきり示すこと。さらには自然の，不思議な余技を説明すること。さまざまな種族の変遷をはじめから述べること。多くの人々の習俗を認識すること。そして，我々が取り上げるここは暗弱な地なので，われわれの居るよりよい場所から世界全体を，その事情を

通覧し，万事をしっかり把握すること。確かにそれは，熱心な精神にとってまったく価値のないことなどではない[86]。

史料（2），（3）には，アイルランドの地誌を紹介して人々の関心を引き出すというギラルドゥスの意図が明示されている。地誌の内容も簡潔に示されている。彼はアイルランドの地誌を著すことによって，自分が優れた文筆家であることを証明しようとしたのである。

では，ギラルドゥスはなぜアイルランドをテーマに選んだのか。（2）で彼は，アイルランドがこれまでほとんど紹介すらされておらず，人々に知られていないことを理由として挙げており，これは事実であると考えてよい。しかし，私はもうひとつ別の意図が『アイルランド地誌』に込められていると考える。それは，ヘンリ二世が進めていたアイルランド征服のために必要な情報を提供し，征服の正当性を立証しようという思惑である。この意図は明確な形で記されていないが，ヘンリ二世宛ての第２序文に記された次の２つの文章で暗示されている。

（4）［私は］かの地［アイルランド］でいわば，裏切り者ではなく，探究者としての職分を果たし，ことに，他の地域にはなくまったく未知の，そして新奇ゆえにたいへん驚くべきことを多く私は観察しました。そして，熱心な探究者として，以下の点を明らかにすることにとりかかりました。つまり，この地はどこにあるのか，その自然は，人々の祖先は，その習俗は。何回，誰により，どのように征服，服属させられたのか。自然は，その通常の道とあいいれないいかに新奇な秘されたことどもを，世界の西のさい果ての地に置いたのか，ということです[87]。

（5）当代のすばらしい栄光がはかなく消えてしまわないように，文章によって，あとあとまでしっかり残るように，陛下ご自身の，またはえある陛下の子息たちの，価値ある長所の数々や戦功を略述することもひじょうに値打ちがあると私は思いました。すばらしい一連の事蹟の記録を受けつぎ，模倣しうる例を持てば，多くの人の心の中で以後徳は力強さを増すでしょう[88]。

史料（4）で目を引くのは「裏切り者ではなく，探究者としての職分を果たした」という句である。これは何を意味するか，推測を含めて検討してみよう。まず「裏切り者」，「探究者」ともにギラルドゥス自身であることは文脈からして間違いない。また，誰にとってなのかといえば，ギラルドゥスが職分を果たした相手，すなわち，ヘンリ二世である。したがって，ここでギラルドゥスは，自分はアイルランドで王の「裏切り者」ではなく「探究者」として任務を遂行したと述べているのである。これら２つの表現は何の説明もなく突然出てくるので，読者はとまどってしまう。しかし，ギラルドゥスとヘンリ二世にはこれで充分理解できた，と私は推定する。それは，第２節で紹介したように，王がギラルドゥスに対して不信感を持っていたからである。

王は，ギラルドゥスが南ウェールズ聖界をリードするセント・デイヴィズ司教になると，血統をたどって俗界のウェールズ人支配者たちと結託して大きな反イングランド勢力をつくり上げるのではないかと危惧していた。ギラルドゥスは間接的に王の危惧を知り，これを払拭するため直接王に仕えて自分の有能さと忠実ぶりを行動で示そうとしていた。その最中に『アイルランド地誌』が構想，執筆されたのであるから，その序文に記された「裏切り者ではなく」とは，自分は王の疑いを知っているが，疑われるような行動をアイルランドで一切しなかったという言明，王に対するいわば釈明にほかならない。

ただし，王の危惧は上記のようにギラルドゥスがウェールズ人支配者たちと手を結ぶことにあり，そのままアイルランドに適用できるわけではない。しかし，アイルランド南東海岸地域にはアングロ・ノルマン貴族の血統をもつ彼の近親者ジェラルド一族が領主として勢力を張っており，彼らは定着後半世期ほどの間に自立性を強めていたから，ウェールズと同様の心配をヘンリ二世がしていた可能性がある。いずれにせよ，この句でギラルドゥスは自分が王の忠実な従者であり，王を裏切る気持ちを少しももっていないと王に伝えたかったのである。

「探究者」は「裏切り者」よりも分かりにくいが，私は，王がギラルドゥスを王子ジョンに随行させた目的の中にアイルランドでの情報収集が含まれていたのではないかと推測している。上記のようにギラルドゥスは現地に近親者をもっており，彼らから敵対するアイルランド人勢力に関して情報を得ることができた。軍隊の実務に疎い聖職者が戦地で行うのに適した仕事である。ヘンリ二世はアイルランド征服がジョンの遠征によって完了するとは考えていなかったから，戦果はともかくとして，近い将来の征服計画に役立つ現地の情報を期待していたのではなかろうか。実際，ギラルドゥスはジョンがほとんど戦果なく帰国した後1年近くアイルランドにとどまり，情報収集に努めている。集まった情報は『アイルランド地誌』や『アイルランド征服』で活用されているから，ギラルドゥス自身にとってまず大きな価値をもっていたが，それだけではなく，王のアイルランド征服にとっても意味あるものだったのであろう。

(4)，(5) には「探究者」に関する私の推定に関連し，これを裏付けると思われる文章が含まれている。それは「何回誰により，どのように［アイルランドが］征服，服属させられたのか」，および，「陛下ご自身の，またはえある陛下のご子息たちの，価値ある長所の数々や戦功を略述することもひじょうに値打ちがあると私は思いました」である。一般的に言えば，過去の征服が地誌の書に書き込まれ，それが，著作の献呈先に宛てて書かれた序文に含まれていても決して不思議ではない。しかし，史料 (4) が言及している征服の歴史を (5) の文章と結びつけると，ギラルドゥスはここでヘンリ二世やその息子たちの戦功，すなわち，アイルランド征服を称える目的で『アイルランド地誌』に征服の歴史

を書きこんだと言明していることになる。彼はヘンリの政策に賛成であると伝えることで，自分が忠実な従者であることを示そうとしているのである。

以上の議論からギラルドゥスは『アイルランド地誌』に２つの意図を込めたと言ってよいだろう。ひとつは，アイルランドの地誌を紹介する著作によって自分の文才と博識を示し，文筆家としての名声を得ること，もうひとつは，ヘンリ二世のアイルランド征服に役立つ情報を提供して，自分は王の忠実な従者であると誇示することである。前者は序文に明記されているが，後者はヘンリ二世に関するいくつかの言及の中に埋め込まれている。

では，上の２つの執筆意図は本文でどのように具体化されているか。この点を本文からの引用によって確かめてみよう。

まず，アイルランドの地誌をまとめようという意図については具体例を挙げる必要はない。前節で紹介した概要を見ればこの著作が何よりも地誌の書であることは明らかである。実際，地誌としての『アイルランド地誌』に対する評価は高く，ギラルドゥスは自信作であることを隠さなかった(89)。また，13 世紀の写本が多くつくられた事実がこの書に対する高い評価を示している。

それに対して，第２の執筆意図については，彼がこれを暗示にとどめていることもあり，具体的な記述によって確認する必要がある。そして，確認のためにはまずどのような記事が役に立つのかまとめておくのが便宜であろう。私は次の３種の記述に注目することにした。第１はアイルランド人・社会に対するギラルドゥスの評価，第２はヘンリ二世のアイルランド征服に関する記述，第３はヘンリ二世自身に対する評価である。少し説明が必要であろう。

第１の点は，ギラルドゥスがアイルランドを征服されるべき地域と見ていたかどうか，あるいは，そうした地域として描き出しているかどうかである。この点はさらに，彼がアイルランドを自分の知識を生かして偏見を交えず描き出しているのか，それとも，征服されるべき地域としてその特異性を誇張しているのか，という点にまで発展する。あえてこのような視点を持ちだすのは，後に彼は『ウェールズ案内』でウェールズ人の弱点を極端に誇張しているからで(90)，同様なバイアスが処女作ですでに見られるかどうかに私は関心を寄せている。第２の点は，ヘンリ二世のアイルランド征服計画に対する表面的な評価だけではなく，征服を正当化する論拠を彼が積極的につくり，提示しているかにまで広がる。積極的な論拠を用意できれば，それは王の彼に対する評価改善につながる可能性が高い。第３の点は，著者が自著の献呈先を称えるのは自然であるとして，称え方の中に彼のスタンスを発見ないし確認できないかという私の期待である。

アイルランドの自然や社会に対するギラルドゥスの評価は『アイルランド地誌』全体に見られるが，まずアイルランド全体を総評している文章を挙げる。

(6) この民は野蛮，まさに野蛮である。服装が野蛮なばかりではなく，頭髪やひげものばし放題にして，現代の風からすればまったく未開である。そして彼らの習慣はどれもまったくもって野蛮なのだ[91]。

(7) 別世界のような遠く隔たったところに彼らはいて，また，節度を知る謹厳な人に親しく接することもないため，自分が生まれ育ったひじょうに野蛮な状態しか知らずそれにしか親しまず，あたかも別の本性であるかのようにそれを慈しむのである[92]。

史料（6）でギラルドゥスはアイルランド人を「野蛮（barbarus）」であると決めつけている。「野蛮」の内容は，頭髪の事例から分かるように，現代的ではなく文明度が低いということである。今日我々はアイルランド人が古くより高度な文化をもち，聖職者を中心に高い文明を享受していたことを知っている。ギラルドゥスはアイルランド人の出自に関して現地の年代記を利用したと述べており，これはおそらく古い年代記のラテン語訳であると推測されている。とすれば，彼はアイルランド人が少なくとも過去において文明度の高い社会を築いていたと知っていたはずである。にもかかわらず，彼は当時のアイルランド人の慣習を部分的に取り上げて，彼らの生活は全体として文明度が低いと拡大解釈しているわけで，これは野蛮性の意図的な誇張である。

ギラルドゥスが文明の規範としているのは，当時新しくイングランドやフランスに広がり始めていた文明であり，それに比べるとアイルランドの社会が古く，遅れた要素を多くもっていたことは事実である。しかし，ギラルドゥスは単に遅れているのではなく，文明に対立する野蛮な状態にあるとしている。加えて彼は（7）で，アイルランドの現状を改善するのは容易なことではなく，放置しておけば改善の見込みはないという判断を示している。彼らは「野蛮な状態」を「慈しんで」いるからである。文明よりも野蛮を大切にしているのであれば，アイルランド人が自発的に，また，自力で文明に到達する可能性はない，長くそうした状態を続けた結果，現在では野蛮がアイルランド人の本性になっている，と言うのである。

その一方でギラルドゥスは次の史料（8）が示すように，野蛮な社会は文明化されるのが望ましいと考えていた。では，どうしたらアイルランドは野蛮から脱出できるのか。この点について彼は何も記していないが，最も確実な方法は文明国であるイングランド王国がアイルランドを征服し，古い社会を壊して，そこに文明社会を導入することであろう。野蛮さの強調は征服を正当化する根拠になる。

ギラルドゥスは『アイルランド地誌』第 3 部で，アイルランド社会の特徴を紹介しながら，それが野蛮であると繰り返し強調している。いわば野蛮さの具体的事例である。

(8) この民は未開人で，無愛想である。獣のみを食べて，獣のように生きている。原始的な牧畜をして暮らす生活からはなれていない。

森から平地へ，平地から村，そして，市民が集住する状態へと人間は進歩していくものだが，この民は農業労働を拒み，都市の富にもほとんど無関心で，市民の権利をそうかえりみもせず，森や草地でこれまで親しんできた生活を忘れ去ることができない[93]。

(9) パトリキウスの時代から長い年月が過ぎ，その間信仰は島に根づいてほとんどたゆまず広まってきたものの，驚くべきことにこの民は現在まで信仰のいろはに無知のままである。

彼らはじつに卑俗で，悪徳におおいに染まり，他のどの人々よりも信仰の基本に無知である[94]。

(10) これほど日常的に人を裏切る民はない。なされた誓いを守る者はひとりもいない。他者への誓約の神聖さを犯すことは茶飯事で，それを恥とも思わず恐れもしない。自分になされた約束はきちんと守られることをのぞむのだが[95]。

(11) じっさいこの民は定見がなく，移り気で，変わり身が早く，ずるい。定見がない点だけが変わらず，不誠実ということにのみ誠実である。

［アイルランド人とかかわりをもつ場合は］彼らの武装よりも術策を，たいまつよりも平和を，怒りよりも甘さを，勇気よりも悪意を，遠征よりも裏切りを，軽蔑すべき敵意よりも見せかけの親しさをずっと恐れねばならない[96]。

(12) 野蛮な兄弟に災いあれ。そして近親者にも。彼らは生きている時から死ぬまで攻撃される。そして，誰かに殺されると，その復讐がなされる[97]。

史料（8）から，ギラルドゥスが文明は順次段階を踏んで発展するという考え方をしていたことが分かる。とすれば，理屈の上ではアイルランド人にも文明化の道が開かれているはずだが，現実にはその可能性はないと断定している。彼らが野蛮に慣れ切って自発的に文明への道に進む気持ちを失っているからである。こうした断定から，アイルランド人のためには外部勢力による強制，すなわち，征服による文明化が必要であるという結論を出すのは容易である。彼自身はそこまで言っていないが，イングランド王宮が一歩進めてそう読むだろうと予測していたのではなかろうか。

史料（9）でギラルドゥスが嘆いているのは，アイルランド人の信仰そのものではなく，信仰に伴う多様なルールや儀式についてである。加えて，彼が正統と考えている教会制度やそのルールはローマ教会が新しく定めて普及に努めていたものであるから，古くから独自の教会組織を発展させていたアイルランド人がこれを知らないのはむしろ当然である。にもかかわらず，彼はここでアイルランド人の信仰全体が遅れているとし，ローマ教会のルールに違反する行為を「悪徳」と断罪している。いわゆるケルト系の教会の実情は，西ヨーロッパ最先端の知識をもち，それを尺度として教会改革を進めてきたギラルドゥスに

とってぜひとも改めるべきものであった。しかし，ウェールズの場合とは異なって彼はアイルランド教会の改革を主張せず，最初から救い難い信徒たちであると決めつけている。

（10）と（11）でギラルドゥスはアイルランド人がその本性からして信頼できない人々であると言っている。文明社会の人々，具体的にはイングランド王宮の人々は誓約を遵守するのであるが，その交渉相手であるアイルランド人支配者たちが生来信頼できないのであれば，和睦を目的とする契約によってことを進めようとしても必ず失敗する。アイルランド人は力で征服するほかにという結論を促しているような文章である。

史料（8）～（11）は地誌に関する記述の中に埋め込まれており，ギラルドゥスが入手したアイルランドの情報を列挙しただけのように見える。特別の意図が込められていると気付きにくい書き方になっている。読む者は誇張ではないかと感じながらも，彼がこうした情報を間接的に，したがって，確認困難な状況で入手したからだろうと推測して，あるいは，この当時のイングランド王宮で共有されていた辺境地域に対する偏見が反映しているのだろうと考えて，そのまま読みすごすことが少なくない。しかし，ここに見られる誇張は意図的なものであると私は考える。ギラルドゥスは自分の文章からイングランド王がアイルランド征服を正当化する根拠を引きだすだろうと期待して，現実との乖離を承知の上でオーバーな表現をしているのであろう。

以上を踏まえてさらに私の推測を進めると，ギラルドゥスは『アイルランド地誌』の2つの序文で自分がヘンリ二世のアイルランド征服を支持していると暗示し，次いで本文のあちこちで征服の根拠となるアイルランドの状況を誇大に描いていることになる。自分の意図をむき出しにせず，しかも，ヘンリに間違いなく伝える巧みな仕掛けである。

もしこの推測が当たっているならば，アイルランドの歴史に関してギラルドゥスが記している次の話も政治的なメッセージを含んでいる可能性が高い。

（13）『ブリタニアの歴史』によれば，かの高貴なベリヌスの息子で，じつに名高いブレンニウスの孫であるブリトン人の王グルグンティウスは，かつて父ベリヌスに征服されたダキアの反乱を制圧して帰る際に，オークニー諸島で船団に出くわした。それにはヒスパニアから来たバスク人が乗っていた。その指導者たちは王のもとに来て，〔自分たちが〕どこから来たか，またその理由は何か－〔具体的には〕西方のどこかに移住すること－を彼に述べた。住む土地を与えてほしいと切願された王は家臣の助言を入れて，現在アイルランドと呼ばれているこの島を，彼らに住むようにと与えた。当時そこはまったく無人だったか，彼によって植民がなされたかであった。王はまた自軍の水先案内人も彼らに提供した。

このことから明らかであるように，ブリタニア王はアイルランドを保有する権利を，古いながら，持つと言える[98]。

ここでギラルドゥスは，古来ブリタニアの王はアイルランドを支配する権利をもっていたと言っている。根拠はジェフリ・オヴ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）の『ブリタニア列王史（Historia Regum Britanniae)』で，書き方から判断すると，彼がこの話をどこまで信じていたか疑わしい。しかし，事実と確認できなくても，ジェフリが伝えるこの話を基にブリタニアの支配者はアイルランドの領有権を持つと主張できる点がギラルドゥスにとって重要だったのであろう。なお，彼の言うブリタニアはウェールズのことであり，イングランド王としてのヘンリ二世と直接つながるわけではない。しかし，ヘンリはウェールズ全体に宗主権をもっており，ウェールズの領主はアングロ・ノルマン貴族，ウェールズ人支配者を問わずヘンリに繰り返し忠誠を誓っていた(99)。この点をよく知っていたギラルドゥスは，古いブリタニア王に由来するアイルランド支配権という話から王が容易に自らのアイルランド征服の根拠を引き出しうると判断したのであろう。

以上のように，ヘンリ二世のアイルランド征服計画は正当なものであるという示唆を重ねたうえで，ギラルドゥスはヘンリ二世に直接語りかけている。

（14）ここまでは歴史である。ここからは国王と王子たちの功績を述べる。

陛下の勝利はこの世界全体と競っております。すなわち，ピレネー山脈から，北の海の西の果てまで，われらが西方のアレクサンドロスたるあなたは腕を広げられました。こうした地域に自然が土地を広げているぶん，あなたは勝利をおさめられました(100)。

（15）いかにしてアイルランドが陛下の功績・勝利の表に加わったか。

どれほどのすばらしい勇気をもって，自然が隠しておいた大洋の秘所に陛下が侵攻されたのか。

じつに早すぎ，時ならず，ひじょうにすばやく，じつにひどいことに，内部の陰謀によって高貴な企てからいかに身を引かれたか－［王は］完全な勝利をおさめたが，まだ地域［アイルランド］はあるべき形をとっていないのだ。－

いかにして陛下の到来というきらめきに驚いた西方の首長たちが，あたかも明りに向かう小鳥のように，ただちに陛下の支配権の下に飛び集まって来たか。・・・・

傲慢で尊大な者たちの首を目を見はる力で踏みつけ，いたる所で敵に勝利したのち，打ち負かされた王侯にどれほど深い慈悲を，大いに危害をこうむった王侯としてどれほど称賛に値する，永遠に記憶され，模範とされるにふさわしい情けを，勝利者である国王陛下はおかけになったことでしょう。そしてじっさい，勝利者である国王陛下は徳でこころを支配し，柔和さで怒りに勝っておられる(101)。

史料（14）は第3部第47章から，（15）は第48章からの引用である。第3部は第54章まで続くが，第49章以下は王の息子など親族の功績について語っており，第47章から第

54章までが全体として『アイルランド地誌』の最終部分，したがって，結論の提示にふさわしい場となっている。その部分の冒頭でギラルドゥスはヘンリ二世の第1回アイルランド征服を称えている。表現はいかにも大げさで現実味を欠いているが，ヘンリのアイルランド征服・支配は正当であるというメッセージは明確である。そして，注目すべきは，第1回征服ではまだアイルランドの支配が「あるべき形をとっていない」と記されている点である。ギラルドゥスはヘンリ自身が再度この地に遠征して支配を完成するよう促しているわけで，明記はしていないが，自分の著作がそれに役立つはずだと主張しているのであろう。

『アイルランド地誌』は地誌としてよくまとまっているが，単なる地誌ではなく，献呈先のヘンリ二世に対する自己アピールの場でもあった。彼はこの著作で献呈する自著の有用性を巧みに示し，それを通して，自分が王の危惧するような危険な存在ではなく，むしろ逆に王に忠実かつ有能な人材であると暗に訴えているのである。

Ⅴ　おわりに

本稿は単独に構想されたものではなく，今後引き続き『アイルランド征服』や『ウェールズ旅行記』についても同様な検討をしたいと考えている。加えて，本稿に始まる3つの拙稿でこれまで私が気付かなかった新しい論点が得られれば，それを先に発表した拙稿「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図とかかわらせて」と照合することによって，『ウェールズ案内』に関する私の理解を確認，あるいは，修正することができるのではないかと考えている。

そこで本稿の締めくくりとして，前節の検討から引き出すことのできた点を整理しておこう。

(1) ギラルドゥスは自らの文才を広く伝えるも目的をもって『アイルランド地誌』を構想し，執筆した。この意図は同書に明記されており，また，充分達成された。今日まで伝えられる文筆家ギラルドゥスの評価はこの処女作によってスタートしたと言ってよい。

(2)『アイルランド地誌』にはギラルドゥスが必ずしも明記していない別の執筆意図も込められている。それは，ヘンリ二世のアイルランド征服に役立つ論理や情報を提供することである。具体的に言えば，①彼はヘンリ二世の業績を賛美しながら，ブリタニア王の権利を継ぐ王にとってアイルランド征服は当然なすべきことだと言っている。

②アイルランド人・社会の文明度は低く，この野蛮な人々と信頼に基づく関係を築くことは不可能であると主張することによって，暗に武力による征服を勧めている。③文明度がはるかに高いイングランド王国がアイルランドを征服すれば，それにともなってアイルランド人・社会の文明度が高まり，これはアイルランド人にとってプラスであるという結論を引き出しうるような論理を提示している。

(3) ギラルドゥスは(2)の執筆意図を盛り込むために，アイルランド人・社会の状況を，自分の知識や判断とは別に，意識的に低く評価している可能性が高い。アイルランド人が古来高度な文化をもっていたことを彼が知らなかったと考え難いのであるが，まったく言及はなされていない。また，12 世紀西ヨーロッパの先進国がもっている文明を尺度として，これに合わないアイルランド人の特徴を全てマイナスに評価し，それもしばしは一見して誇張と分かる表現を使って断罪している。

(4) ギラルドゥスが極端なアイルランド像を著作の中に組み込んだのは，『アイルランド地誌』の構想・執筆時に彼が自分の生涯計画実現を阻む大きな問題をかかえていたからである。王に直接仕える者が王の意向に沿った行動をとるのは自然なことであり，文筆の才を発揮したいと考える者であれば王を喜ばす作品をつくって献呈するのはよい方法である。しかし，ギラルドゥスはより個人的かつ深刻な理由があって同書の著述に取り組んだ可能性が高い。それはヘンリ二世が，ギラルドゥスにセント・デイヴィズ司教の地位を与えると彼は血縁関係にあるウェールズ人支配者たちと結託する危険性があるとして，司教候補となった彼を拒否していたからである。ギラルドゥスは遅くとも第 1 回パリ留学を終えるまでに，セント・デイヴィズ司教となりウェールズ全体の聖界をリードしたいという生涯目標を立てていたが，ヘンリ二世が上記のような判断をもっているかぎり目標達成はできない。『アイルランド地誌』の構想・執筆時に彼はこのような窮地に立たされていたのである。この問題を乗り越えるために彼は，王の自分に対する判断ないし評価を実践によってくつがえすという新しい戦略を進めていた。

(5) 私は先行拙稿で，王宮の職を辞した後の行動から，『アイルランド地誌』に始まる 4 部作を構想，執筆した時期のギラルドゥスがこうした戦略を密かに立てていたのではないかという仮説を立てて検討してきたが，本稿でこの仮説が当たっていることを彼自身の表現で確認できた。前節の史料(4)に記された「裏切り者ではなく，探究者として」自分は王子ジョンのアイルランド遠征に随行したという文章は，彼が王を裏切るかもしれない危険な存在だと自分が見なされていることを知っていて，これは誤解であり，実際自分は王のための「探究者」として活動した，自分は王の忠実な家臣であると主張しているのである。

追記

この拙い文章を，このたび経済学部を退職された菅井益郎氏と木下順氏に贈る。

お二人はともに反骨の士であり，その反骨ぶりから私は多くのことを学んできた。改めて御礼申し上げる。

反骨の士に贈るものとして拙文はあまりにも凡庸であるが，ご受容くだされば有難く思う。

註

以下の註では，ギラルドゥスの著作を挙げる場合には原則として編者や訳者の名を省略し，拙稿が序文，解説，註などに記された彼らの見解を参照した場合にのみその名をカッコの中に付記している。

第 1 節

(1)　[1] Giraldus Cambrensis.

(2)　[86] 永井，[92] 永井。

(3)　『アイルランド地誌』，『ウェールズ旅行記』，『ウェールズ案内』はそれぞれ，[2] Giraldus Cambrensis，[3] Giraldus Cambrensis. [4] Giraldus Cambrensis。

(4)　[4] Giraldus Cambrensis，p. 151. [26] Giraldus Cambrensis，p. 211.

(5)　[29] Bartlett，ch. 6，[82] 有光，第 3 章，[88] 永井，第 8 節。

(6)　[92] 永井。

(7)　[92] 永井，第 3，第 5 節。

(8)　[86」永井，第 3 節。

(9)　[86] 永井，第 4 節。

(10)　[86] 永井，第 2 節。

(11)　[86] 永井，第 4 節。

(12)　[92」永井，第 3 節。

(13)　[92」永井，第 4 節。

(14)　[92」永井，第 5 節。

(15)　多くの読者は『ウェールズ案内』を次のように受けとめるのではなかろうか。他の国，地域とは違ったウェールズを紹介するという序文中の言葉からまず第 1 巻にはいり，自然，社会，歴史，文化など地誌の記述を読み進める。次に，第 2 巻の序文，すなわち，第 1 巻ではウェールズ人の長所のみ取り上げたので第 2 巻では短所を挙げるというギラルドゥスの言葉に多少の違和感をもちつつも，第 2 巻を第 1 巻の地誌の延長として読む。最後に地誌とは無縁の末尾 3 章で，イングランド王に向けたウェールズ征服・統治に関する提案とウェールズ人支配者に向けたウェールズの自立回復提案を見てとまどう。

(16)　[92] 永井，第 6 節。

(17)　[89] 永井，第 3 節。

第 2 節

(18)　ギラルドゥスが『アイルランド地誌』を具体的に構想したのは，彼が王子ジョンのアイルランド遠征に随行した時だろうと推定されている。[26] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.))，p. 15.

また，『ウェールズ案内』第 2 版が完成した年についてはバートレットの推定に従っている。[29]

Bartlett, p. 216.

(19)　以下本節では，3点の先行拙稿を利用する。[89] 永井，[90] 永井，[91] 永井である。[89] 永井はギラルドゥスの前半生期を，後の2点は彼の後半生期を扱っているので，『アイルランド地誌』と時期的に重なるのは [89] 永井であるが，本稿に始まる3点の拙稿はギラルドゥスの著作を初版だけではなく，2，3版にまで視野を広げて検討するので，本節では彼の後半生期についても触れ，その際 [90] 永井，[91] 永井も参照する。

(20)　[89] 永井，第2節。

(21)　[89] 永井，第2節。

(22)　彼は後日アイルランドの2つの司教就任とウェールズのサンダフ司教就任の提案を受けたが，いずれも断っている。

(23)　彼は豊かな文才と知識を駆使して多くの著作を発表した。その中には同時代から高い評価を得て，多くの写本がつくられたものも含まれている。彼の願望は，まずは満たされたと言ってよい。

(24)　1177年の第2回パリ留学，1196年のパリ留学計画とリンカーン居住がその例である。

(25)　ただし，彼が嘆いているのは報酬の少なさであり，任務そのものを嫌っていたわけではない。実際彼は熱心に任務を遂行している。彼は文才だけではなく，政治的センスも充分もっていた。

(26)　[89] 永井，第3節。[90] 永井，第3節。

(27)　セント・デイヴィズ教会は古くよりウェールズで最も権威ある司教座であると自負していたが，11世紀末にイングランド勢力の圧迫を受けて古来の地位が揺らぎ始めると，リギヴァルフ（Rhigyfarch）に聖デイヴィッドの伝記をつくらせて，かつて同教会は大司教座であり，一度この地位を失ったが，その権威は変わらず今日でも保持していると主張した。ギラルドゥスはこの伝記を下敷きにして，より具体的な説明を加えた『セント・デイヴィズ大司教聖デイヴィッド伝』を書いた。[11] Giraldus Cambrensis [90] 永井，第4節。

(28)　ギラルドゥスは，①イングランド王権はウェールズ教会にも支配を及ぼし，独自の聖界支配体制をつくろうとしている。②この動きをローマ教皇は危険視している可能性が高い。③ウェールズの教会が大司教座を獲得しようとすれば，教皇はイングランド王権との対立の中で味方してくれるはずである，と考えたのである。

(29)　ギラルドゥスは1203年にカンタベリー大司教ウォルターと交わした約束の中で，以後セント・デイヴィズ教会の大司教座権を口にしないこと，他人がこの権利を主張しても，それに反対することを誓っている。[90] 永井，第9節。

(30)　4著作の最後の作品『ウェールズ案内』の第1版が完成したのは1191年であり，セント・デイヴィズ教会の大司教座権を組み入れた作戦がはっきり姿を見せるのは1197年である。

(31)　『自叙伝』で彼は，第1回パリ留学を終える際に以後自分だけのために生きるのではなく，自分の国ウェールズのために尽力する決心をしたと述べている。[5] Giraldus Cambrensis, pp. 23～24. [27] Giraldus Cambrensis, pp. 4～5.

(32)　ギラルドゥスは南ウェールズ教会改革についてカンタベリー大司教の了承をとり，大司教代理として取り組んでいる。

(33)　南ウェールズの教会改革の中でギラルドゥスはしばしばウェールズ人支配者の支援を得て，住民の不満を抑え込んでいる。

(34)　セント・デイヴィズ教会は2回の司教選出でギラルドゥスを最有力候補に推挙している。彼がつくりだした人脈の中で最も長く，安定した後ろ盾となった。

(35)　12世紀後半のイングランド王国では，王宮付き司祭となって王に仕えた者がしばしば司教に任命されている。王宮付き司祭は司教へのひとつのステップと見なされていた。

(36)　1158年，1163年，1171年，1175年，1177年，1184年。

(37)　ギラルドゥスの南ウェールズ教会改革はしばしば聖俗ウェールズ人支配者たちの既得権を排して進められたにもかかわらず大きな政治問題にならなかった。そのひとつの理由は彼が出自の二元性を基に弁舌の才を発揮して説得したからであろう。

(38)　ギラルドゥスの伯父デイヴィッドの司教就任を契機として，ウェールズ内の司教選出についてひとつの慣行が成立していた。すなわち，司教座教会は，①あらかじめイングランド王宮の意向を打診した上で複数の司教候補を推挙する。②その中から王が次期司教を選定する。③その司教にカンタベリー大司教が聖別を与え，その際自分への忠誠を誓わせる，という手続きである。

(39)　ギラルドゥスはウースター司教ロジャー（Roger）が王の真意を密かに伝えてくれたと記している。[5] Giraldus Cambrensis，p. 43.［27］Giraldus Cambrensis，p. 22.

　ギラルドゥスは当初よりイングランド王宮とウェールズ人支配者たちとの間に立って，それもヘンリ二世のために働いてきたと自負していたはずで，王の判断に納得できなかったと推測される。しかし，王の判断であれば，これに正面から論争を挑むことはできなかった。

(40)　ギラルドゥスは自分の能力に大きな自信をもち，それを誇示する機会を逃さなかった。また，晩年になっても彼は，これほどの能力をもつ自分がそれにふさわしい地位を得られなかったのは不当であると繰り返し嘆いている。

(41)　『自叙伝』でギラルドゥスは合計 4 箇所の司教職の申し出を受けたと記しているが，私は 3 箇所しか確認していない。ウェールズのサンダフ司教区は，アングロ・ノルマン勢力が南東ウェールズに侵入した後つくられたもので，権威においてセント・デイヴィズ司教と比較にならなかった。[5] Giraldus Cambrensis，pp. 65，87.［27］Giraldus Cambrensis（Rutherford（ed.，trans.）），pp. 44，70.

(42)　ギラルドゥス自身は作戦変更に言及していない。しかし，『アイルランド地誌』の序文で彼は，ジョン王子のアイルランド遠征に随行した際自分が「裏切り者」としてではなく，「探究者」として行動したことを認めてほしいとヘンリ二世に訴えている。こうした表現で彼は自分の親イングランド的スタンスを誇示している。第 4 節の史料(4)を参照。

(43)　［89］永井，第 3 節。

(44)　［89］永井，第 3 節。

(45)　セント・デイヴィズ教会の一部に大司教ボードウィンの来訪を阻止しようという動きがあった。［3］Giraldus Cambrensis，pp. 15～16.［26］Giraldus Cambrensis，pp. 76～77.［89］永井，第 3 節。

(46)　司教ピーターの死は直ちにギラルドゥスに伝えられ，次々と彼を次期司教にするための手続きが進められた。こうした迅速な動きは事前に作戦が立てられ，共有されていたことをうかがわせる。私は，1189 年に始まり 1203 年まで続いたこのイングランド王宮との対立を「セント・デイヴィズ問題」と呼んでいる。［90］永井，第 5 節。

(47)　［90］永井，第 5 章。

(48)　教皇はギラルドゥスが提示したセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関心を示し，教皇庁の文書館に関連資料がないか彼自身探索することを許した。また，ギラルドゥスから数点の著作を受け取り，そのうち 1 点は手元に置くと表明するなど，個人的にも彼に好意を示した。［90］永井，第 4 節。

(49)　カンタベリー大司教の働きかけがあったとはいえ，短期間でセント・デイヴィズ教会内に反ギラルドゥス派ができたことから判断して，同教会の支持は彼の言うほど堅固ではなかったと考えるべきであろう。

(50)　［90］永井，第 9 章。

(51)　［90］永井，第 9 節。私はこの争いを「ブレコン問題」と呼んでいる。「ブレコン問題」をめぐって彼が書いた一連の手紙を一緒にまとめたのが『二人の鑑（Speclum Duoru）』（［18］Giraldus Cambrensis）である。

(52)　[91] 永井，第5～第7節。

第3節

(53)　[5] Giraldus Cambrensis，p. 65. [27] Giraldus Cambrensis，pp. 44～45.

(54)　[29] Bartlett，p. 213.

(55)　[5] Giraldus Cambrensis，pp. 72～73. [27] Giraldus Cambrensis，p. 51.

(56)　[5] Giraldus Cambrensis，p. 79. [27] Giraldus Cambrensis，p. 57.

(57)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 8. [21] Giraldus Cambrensis，p. 18.
マーティン（Martin，F. X.）は，ギラルドゥスが参照したと言っているアイルランドの年代記は Lebor Gabala Eireann のラテン語訳だったろうと推定している。[16] Giraldus Cambrensis（Scott & Martin（ed.，trans.），pp. 271～72.

(58)　これは，ギラルドゥスがアイルランド征服を目論む遠征軍に加わっていたことを考えれば当然であろう。

(59)　[29] Bartlett，p. 213.

(60)　[1] Giraldus Cambrensis（Dimock（ed.），pp. civ～cvi.

(61)　[29] Bartlett，pp. 213～14.

(62)　[29] Bartlett，p. 213.

(63)　[29] Bartlett，p. 213.

(64)　第3に属するマニュスクリプトを挙げる。[29] Bartlett，p. 213.
British Library，Arundel 14（13世紀）
British Library，Royal 13，B. viii（13世紀，不完全）
Brirish Library，Add. 33. 911（13世紀，第1版と第2版の中間的内容）
Oxford，Bodleian，Rawlinson B. 188（13世紀）

(65)　第4版に属するマニュスクリプトを挙げる。[29] Bartlett，p. 213.
Cambridge University Library，Ff. 1. 27（13世紀）
Bibliotheque Nationale（Paris），Lat. 4846（14世紀）

(66)　[29] Bartlett，p. 214.

(67)　[1] Giraldus Cambrensis（Dimock（ed.），pp. civ～cv.

(68)　[1] Giraldus Cambrensis（Dimock（ed.），p. cvi.

(69)　[1] Giraldus Cambrensis（Dimock（ed.），p. xiii.

(70)　[21] Giraldus Cambrensis（有光（訳））.

(71)　[20] Giraldus Cambrensis（O' Meara（ed.））.

(72)　アイルランド，ウェールズに関する4部作の中から版による違いが重要な意味をもつ例をひとつ挙げれば，『ウェールズ案内』第2巻第9章の記述である。同書第1版でギラウドゥスは，王の軍隊がウェールズを征服した後この地域から住民を完全に追い出し，一度無人の地としたうえで新しい住民を入植させると統治が容易になるという他人の説を紹介したが，第2版で彼はこの部分を削除している。[86] 永井，第4節。

(73)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 3～8. [21] Giraldus Cambrensis，pp. 13～19.
原文タイトルは，Introitus in Recitationem.

(74)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 6～7. [21] Giraldus Cambrensis，p. 17.
原文は第4節の註（86）を参照。

(75)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 20～21. [21] Giraldus Cambrensis，pp. 20～22.
原文タイトルは，Praefatio Secunda.

(76)　[21] Giraldus Cambrensis（有光（訳）），p. 278，註（20）.

(77)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 22～73.［21］Giraldus Cambrensis，pp. 23～94.
原文タイトルは，Incipit Hibernicae Historiae Distinctio Prima.

(78)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 74～137.［21］Giraldus Cambrensis，pp. 95～184.
原文タイトルは，Incipit Distinctio Secunda，de Mirabilibus Hiberniae et Miraculis.

(79)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 138～202.［21］Giraldus Cambrensis，pp. 185～273.
原文タイトルは，Incipit Distinctio Tertia，de Terre Istius Habitatoribus.

(80)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 138.［21］Giraldus Cambrensis，p. 187.
Tamquam digniorem operis partem.

(81)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 153.［21］Giraldus Cambrensis，p. 205.
原文は第 4 節の註（6）を参照。

(82)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 166.［21］Giraldus Cambrensis，p. 223.
原文は第 4 節の註（11）を参照。

第 4 節

(83)　[1] Giraldus Cambrensis，pp. 3～4.［21］Giraldus Cambrensis，pp. 13～14.

Consideranti mihi quam brevis et fluxa sit vita quam ducimus，eorum praeclara fuisse videtur intentio，quibus，nondum patefacta vitae via，operae pretium fuit et curae，egregium aliquod mundo memoriale relinquere，famamque sui perlongam facere，et momentaneam sitam saltem memoria vivere posse post vitam.・・・・

Haec summis auctoribus prima fuit et praecipua scribendi occasio. Altera vero，nec merito minus quam numero secunda，nobelium principum tam remuneratio quam exhortatio.・・・・

Cessante igitur olim occasione scribendi hac ultima，cessare coeperunt et poemata. Nec tamen omnino vel poesis abolita，vel absumpta est philosophia；nec rerum inclite gestarum memorabilis auctoritas obsolevit. Non desunt enim artes，sed artium honores.

本節で引用する史料の翻訳はすべて有光氏の和訳に従っている。

(84)　[5] Giraldus Cambrensis，p. 57.［27］Giraldus Cambrensis，p. 37.

(85)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 7.［21］Giraldus Cambrensis，p. 17.

Quae vel nullis hactenus edita sunt，vel perpaucis enucleate，lectoris animun excitare；expressamque Hiberniae topographiam hoc opusculo quasi speculo quodam dilucido repraesentare，et cunctis in commune palam facere.

(86)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 7.［21］Giraldus Cambrensis，pp. 17～18.

Terrarum enimvero remotissimarum tam qualitates quam situs saltem a longe speculari，et abditas ab antiquo proprietates evolvore；rerumque ominium fere，quasvel mundo majori ad ornatum，vel minori ad usum natura produxit，tam naturas quam defectus enodare；necnon et naturae ipsius excursus tam stupendos explicare；variarumque gentium originalem a puncto lineam ducere；hominumque mores nosse multorum；et quoniam tarde et infirma est terra quam gerimus，parte nostri meliore mundum universum，mundique causas vel mente percurrere，et omnia in promputo habere studiosis animis non ultima laus est.

(87)　[1] Giraldus Cambrensis，p. 20.［21］Giraldus Cambrensis，p. 20.

Ubi non tamquam transfugae，sed exploratoris officio fungens cum in primis multa notarem aliis regionibus aliena nimis et prorsus incognita，suique novitate valde miranda；coepi diligens scrutator eruere，quis terrae situs，quae natura，quae gentis origo，qui mores；quoties，a quibus，et

qualiter subacta sit et expuggnata; quae nova, quaeve secreta, contra solitum sui cursum, in occiduis et extremis terrarum finibus natura resposuit.

「裏切り者ではなく（non tamquam transfugae）」については説明が必要であろう。まず，この訳は他の引用と同様に有光氏の翻訳に従っている。つぎに transfuga をラテン語辞典で調べると，語義は「（義務や家族を）捨てた人」「逃亡者」と説明しており，「裏切り者」とは違った印象を与える語義である。しかし，この語と同根の transfugio や transfugium は「敵方に逃亡する」や「敵方に逃亡すること」を意味しており，上記の“transfugae”にもこうした意味の広がりがある可能性が高い。こう考えると有光氏の訳は妥当であり，むしろ，ややあいまいな表現を駆使しているギラルドゥスの真意を的確に表現していると考えてよい。

(88)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 21. [21] Giraldus Cambrensis, p. 21.

Dignas quoque tam vestras, quam inclitae prolis vestrae virtutes, et victoriarum titulos summatim evolvere, stiloque perstringere, non indignum reputavi; ut tanta temporis nostri gloria transitorie non pertranseat; verum enimvero literarum beneficio firnum perpetuitatis robur obtineat.

なお，この文章は第 1 版にはなく，第 2 版で追加された部分である。

(89)　[5] Giraldus Cambrensis, pp. 72～73, 79. [27] Giraldus Cambrensis, pp. 51, 57

(90)　[92] 永井，第 5 節。

(91)　[1] Giraldus Cambrensis, pp. 152～53. [21] Giraldus Cambrensis, p. 205.

Gens igitur haec gens barbara, et vere Barbara. Quia non tantum barbaro vestium ritu, verum etiam comis et barbis luxuriantibus, juxta modernas novitiates, incultissima; et omnes eorum mores barbarissimi sunt.

(92)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 153. [21] Giraldus Cambrensis, pp. 205～206.

Cum a convictu mores formentur, quoniam a communi terrarum orbe in his extremitatibus, tanquam in orbe quodam altero, sunt tam remoti, et a modestis et morigeratis populis tam segregati, solam nimirum barbariem in qua et nati sunt et nutriti sapiunt et assuescunt, et tamquam alteram naturam amplectuntur.

(93)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 151. [21] Giraldus Cambrensis, p. 204.

Est gens haec gens silvestris, gens inhospita; gens ex bestiis solum et bestialiter vivens; gens a primo pastoralis vitae vivendi modo non recedens.

Cum enim a silvis ad agros, ab agris ad villas, civiumque convictus, humani generis ordo processerit, gens haec, agriclturae labores aspernans, et civiles gazas parum affectus, civiumque jura multum detrectans, in silvis et pascuis vitam quam hactenus assueverat nec desuescere novit nec descire.

(94)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 164. [21] Giraldus Cambrensis, p. 221.

Cum a tempore Patricii, per tot annorum curricula, fides in insula fundata fuerit, et fere continue pullulaverit, mirum quod gens haec in fidei rudimentis hactenus manserit tam inculta.

Gens enim haec gens spurcissima, gens vitiis involutissima, gens omnium gentium in fidei rudimentis incultissima.

(95)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 165. [21] Giraldus Cambrensis, p. 222.

Prae omni alia gente proditionibus semper insistunt; fidem datam nemini servant. Fidei et sacramenti religionem, quam sibi observari summopere volunt, aliis praestitam quotidie violare nec verecundantur nec verentur.

(96)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 166. [21] Giraldus Cambrensis, pp. 223～24.

Est etenim gens haec gens inconstans, gens varia, gens versipellis et versuta: gens sola insta-

bilitate stabilis, sola infidelitate fidelis:

Est igitur longe fortius timenda eorum ars, quam Mars; eorum pax, quam fax; eorum mel, quam fel; malitia quam militia; proditio quam expeditio; amicitia defucata, quam inimicitia despicata.

(97)　[1] Giraldus Cambrensis, pp. 167～68. [21] Giraldus Cambrensis, p. 226.

Vae autem fratribus in populo barbaro. Vae et cognitas. Vivos enim ad mortem persequuntur: mortuos et ab aliis intermptos ulciscutur.

(98)　[1] Giraldus Cambrensis, p. 148. [21] Giraldus Cambrensis, p. 200.

Sicut Britannica refert historia, rex Britonum Gurguntius, nobilis illius Belini filius, et Brennii famosissimi nepos, rediens a Dacia, quam olim a patre suo subactam et sibi jam rebellem iterum subjugaverat, apud insulas Orcadum classem invenit, quae Basclenses de Hispaniarum partibus illuc advectaverat. Cum ergo duces eorum ad regem accessissent, et unde huc advenerint, causamque adventus, ut aliquam scilicet terram in occidentis partibus inhabitarent, ei proposuissent; cum etiam summopere jam flagitassent, ut aliquam terram eis inhabitandam concederet, rex tandem de suorum consilio insulam istam quae nunc Hibernia vocatur, et quae tunc vel vacua prorsus fuerat, vel per ipsum habitat, eis inhabitandam concessit, De suis etiam navigationis duces ipsis adhibuit.

Ex quo patet, nonnullo jure, licet antique, Britanniae reges Hiberniam contingere.

(99)　第 2 節の註（36）を参照。

(100)　[1] Giraldus Cambrensis, pp. 189～90. [21] Giraldus Cambrensis, p. 257.

Hactenus historia. Ab hinc autem de titulis regis, regiaeque prolis. Certant enim cum orbe terrarum victoriae vestrae: cum a Pirenaeis montibus usque in occiduos et extremos fines, Alexander noster occidentalis brachium extendisti. Quatum igitur his in partibus natura terras, tantum et victorias extulisti.

(101)　[1] Giraldus Cambrensis, pp. 190～91. [21] Giraldus Cambrensis, pp. 258～59.

Qualiter igitur titulis et triumphis vestris Hibernicus orbis accesserit:

Quanta et quam laudabili virtute, oceani secreta, et occulta naturae deposita transpenetraveris.

Quam praemature et intempestive, quam celerrime et scelerosissime, intestina conspiratione ab ausu nobili revocatus fueris: vctoria tamen completa, sed nondum in formam regione redacta:

Qualiter fulguranti adventus vestri lumine attoniti, occidentales reguli, tanquam ad lucubram aviculae, ad vestrum statim imperium convolaverint. ・・・・

Quantam misericordiam, et quam laudabilem in principe et capitaliter offenso rege clementiam, perpetuaque memoria et exemplo dignssimam, superborum et sublimium collis mira virtute calcatis, et hostibus ubique triumphatis, in reges et principes victos rex et victor exercueris, Et vere rex vctor, animum virtute regens, iramque modestia vincens.

参照文献

Ⅰ　史料

（A）ギラルドゥスの著作と訳本

[1] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambernsis,* vol. 5, H. M. S. O., 1867)（『アイルランド地誌』）

[2] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 5, H. M. S. O., 1867)（『アイルランド征服』）

[3] Giraldus Cambrensis: Itinerarium Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6, H. M. S. O., 1868)（『ウェールズ旅行記』）

[4] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 6, H. M. S. O., 1868)（『ウェールズ案内』）

[5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 1, H. M. S. O., 1861.)（『自叙伝』）

[6] Giraldus Cambrensis: Gemma Ecclesiastica (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862)

[7] Giraldus Cambrensis: De Principis Instructione (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891)

[8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)

[9] Giraldus Cambrensis: Speculum Ecclesiae (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873)

[10] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863)（『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』）

[11] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.)（『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』）

[12] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.)（『ヨーク大司教ジョフレイ伝』）

[13] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Ethelberti (in [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum)

[14] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Remigii (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis,* vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[15] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Hugonis (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978.（『アイルランド征服』）

[17] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920.（『論駁』）

[18] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974.（『二人の鑑』）

[19] Giraldus Cambrensis: Topography of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn,

1863.（『アイルランド地誌』）

[20] Gerald of Wales,（O' Meara, John（trans.））: *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951.（『アイルランド地誌』）

[21] ギラルドゥス・カンブレンシス,（有光秀一訳）:『アイルランド地誌』, 青土社, 1996 年。

[22] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Irelamd（in Wright, Thomas（ed.）, Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt（trans.）: *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.（『アイルランド征服』）

[23] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales（in Wright, Thomas（ed.）, Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt（trans.）: *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863）（『ウェールズ旅行記』）

[24] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales（in Thorpe, Lewis（trans.）: *The Journey through Wales and The Description of Wales, Penguin Books*, 1978.（『ウェールズ旅行記』）

[25] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales（in Wright, Thomas（ed.）, Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt（trans.）: *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863）（『ウェールズ案内』）

[26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales（in Thorpe, Lewis（trans.）: *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978.（『ウェールズ案内』）

[27] Giraldus Cambrensis（Rutherford, Anne（ed., trans.））: *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145～1223)*, Rhwymbooks, 2002.（『自叙伝』）

Ⅱ 研究文献

[28] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079～1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.

[29] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146～1223*, Clarendon Press, 1982.

[30] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe.（in [61]）

[31] Brooke, Christopher N. L.: The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk.（in [32]）.

[32] Brooke, Christopher N. L.: *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.

[33] Charles-Edwards, T. M.: Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.

[34] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.

[35] Davies, J. Conway: Giraldus Cambernsis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46

[36] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093～c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.

[37] Davies, R. R.: *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063～1415*, University of Wales Press, 1987.

[38] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.

[39] Edwards, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.

[40] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.

[41] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec. (in [76]).

[42] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation,* Boydel Press, 2007.

[43] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [42]).

[44] Holmes, Urban T.: The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanisitica*, new series, vol. I, 1970.

[45] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.

[46] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095～1291*, University of Wales Press, 2011.

[47] Isaac, G. R.: The Cult of St. David. (in [42]).

[48] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.

[49] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.

[50] Kightly, Charles: A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188. Cadw, 1988. (和訳書 [84])

[51] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [76]).

[52] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067～1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.

[53] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.

[54] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretationsof the Welsh Middle Ages, c. 1860～1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.

[55] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.

[56] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to he Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.

[57] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.

[58] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christpher Davies, 1974.

[59] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.

[60] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.

[61] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007

[62] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [40])

[63] Rees, J. F.: *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.

[64] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.

[65] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.

[66] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750 th Anniversary of his Death,

Traditio, vol. 29, 1973.
[67] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [42])
[68] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David. (in [42])
[69] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
[70] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
[71] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063～1283*, Longman, 2002.
[72] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentaion by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
[73] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [58])
[74] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書[83])
[75] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
[76] Walker, R. F. (ed.): Pembrokeshire County History, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
[77] Walker, R. F.: The Earls of Pembrokeshire, 1138～1379. (in [76]).
[78] Williams, A. H.: *An Intoroduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
[79] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
[80] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [58])
[81] Wooding, Jonathan M.: The Figure of David. (in [58])

[82] 有光秀行「ジェラード・オヴ・ウェイルズのウェイルズそしてアイルランド」(樺山紘一（編）『西洋中世像の革新』, 刀水書房, 1995 年所収)。
[83] D. ウォーカー（編）(木下智雄（訳)):『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009 年。
[84] C. カイトリー（和田葉子（訳)):『中世ウェールズをゆく－ジェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』, 関西大学出版部, 1999 年。
[85] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズ－独立をかけた戦い」(青山吉信編著『世界歴史大系　イギリス史Ⅰ　先史～中世』, 山川出版社, 1991 年)。
[86] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」,『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号, 2009 年。
[87] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界（Ⅰ), (Ⅱ)」『国学院経済学』第 59 巻 1 号, 2010 年, 第 59 巻 2 号, 2011 年。
[88] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価（Ⅰ), (Ⅱ)」『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号, 2011 年, 第 60 巻 2 号, 2012 年。
[89] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン（Ⅰ), (Ⅱ)」『国学院経済学』第 62 巻 2 号, 2014 年。第 62 巻 3 号, 2014 年。
[90] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題（Ⅰ), (Ⅱ), (Ⅲ)」『国学院経済学』第 63 巻 1 号, 2014 年, 第 63 巻 3・4 号, 2015 年, 第 64 巻 1 号, 2015 年。
[91] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』(Ⅰ), (Ⅱ)」『国学院経済学』第 64 巻 2 号, 2015 年, 第 64 巻 3 号, 2016 年。
[92] 永井一郎「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに」

『国学院経済学』第 65 巻 1 号，2016 年，第 65 巻 2 号，2017 年。

ギラルドゥス・カンブレンシスの主要著作

著作名	完成年（複数の版がある場合は第 1 版）
Topographia Hibernica.	1187 か 1188 年。
Expugnatio Hibernica.	1189 年。
Itinerarium Kambriae.	1191 年ころ。
Descriptio Kambriae.	1194 年ころ。
De Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi.	1194 年以降。1199 年以前。
Vita Garfridi Archiepiscopi Eboracensis.	1195 年ころ。
Vita Sancti Ethelberti.	1195 年ころ。
Gemma Ecclesiastica.	1197 年ころ。
Vita Sancti Remigii.	1198 年ころ。
Symbolum Electorum.	1199 年ころ。
Vita Sancti Hugonis.	1213 年ころ。
Invectiones.	1200 年以降，1216 年以前。
De Rebus a Se Gestis.	1208 年以降，1216 年以前。
Speculum Duorum.	1216 年。
De Jure et Statu Menevensis Ecclesie.	1218 年ころ。
De Principis Instructione.	1219 年ころ。
Speculum Ecclesiae.	1219 年以降。

参照文献

Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146～1223*, (1982), Appendix 1 The Chronology and Manuscriputs of Gerald's Works.